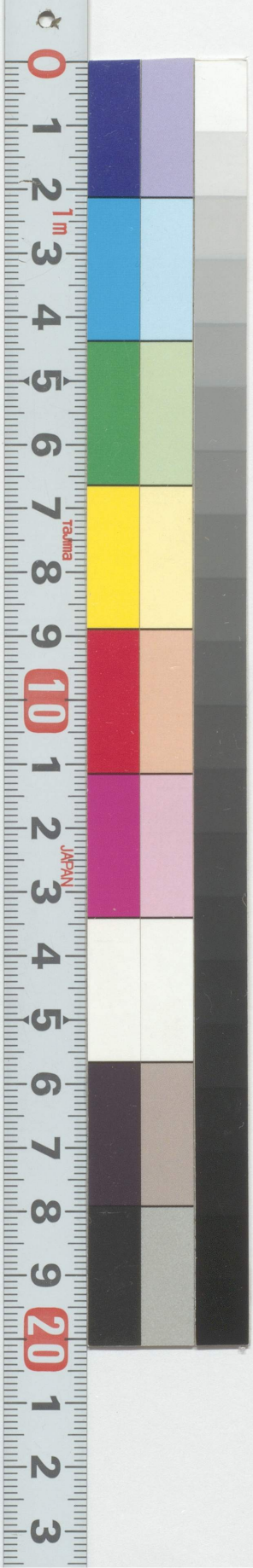




櫻花全集

第三號



會告

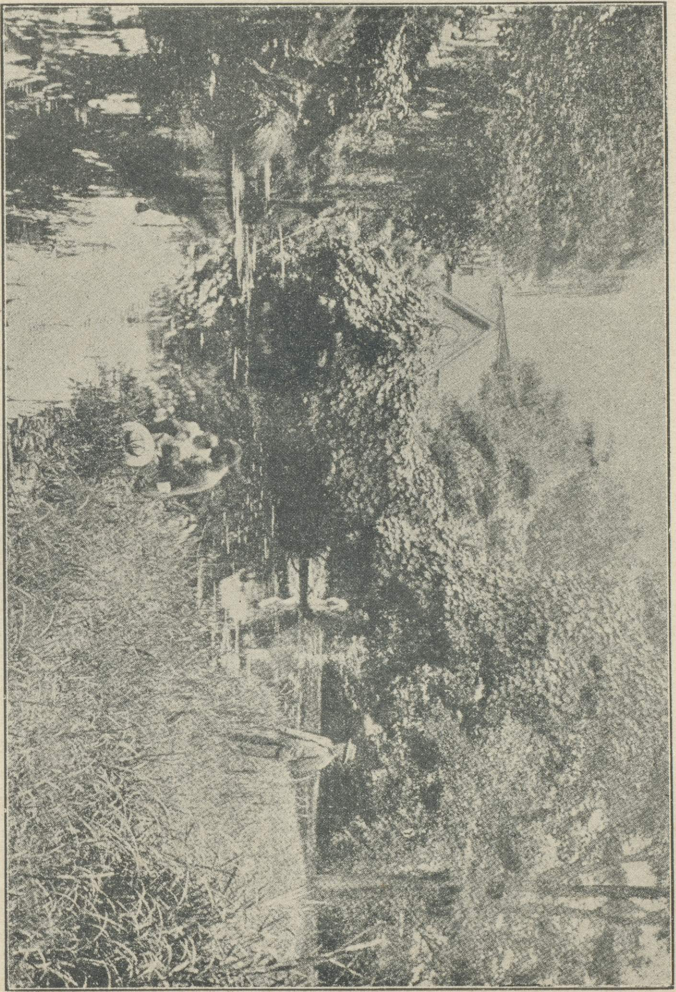
●其一

明治三十七年七月二十四日第一回總會に於て本文記載の通り本會の規則を確定せり此段會員諸君に報告す

●其二

本會は第一回總會に於て第三回國債募集の事ある時事務所新築寄附金中の金壹千圓を以て應募することに議決せり此段會員諸君に報告す

櫻 蔭 會



ニハに繁茂せるはニハの大木

(國狩石) 館物博校學農幌札

緊急通告

拜啓 母校創立三十年紀念寄附金の儀先般櫻蔭會々報第一號及第二號にて詳しく御協議申上候へばとくに御承知の御事と存上候然るに右紀念日十一月二十九日も目前に迫り候今日に於て集り居候金額は百五十餘圓に不過候之は卒業生九百餘名といふ大數に對し餘り寡少にて遺憾の儀に有之皆様にも必ず御同感の御事と存上候就ては御賛成の御方は此際至急御送金被下度切望致候尙念の爲左の件申添候

一金額 金壹圓以上

一日限 本月二十日限

一名宛 東京市本郷區弓町一ノ十一矢作てつ宛

委員 矢作てつ 神通せき

明治卅七年十月

斯波やす 松村久

大羽久

女子高等師範學校創立三十年紀念寄附金に
關する報告

一金壹百五拾參圓也

三十七年三月より九月十六日に至るまでの
領收總高

内譯

一金四拾九圓也

四十七人分(四月中)

一金百四圓也

百二人分(五月以後)

此内

一金九拾六圓

東京貯蓄銀行貯金

一金五拾五圓

尾張屋銀行特別當座預金

一金貳圓

現金

委員 矢作てつ

斯波 安

神通せき

松村

大羽久

久

緊急通告

櫻蔭會々報第參號目次

緊急通告并に女子高等師範學校創立三十年紀念寄附金に關する報告

本會 會 記 事 告

第一回總會	一頁
同上懇親會	九頁
第一回總會庶務報告	十頁
第一年度會計決算報告	十一頁
櫻蔭會規則	十二頁
決議要項	十四頁
會計豫算	十五頁
本會役員	十七頁
事務所新築調査委員	十七頁
創立委員への慰勞	十八頁



客員會員の動靜

通 信

中嶋 敏君 二十三頁
 安井 哲君 二十八頁
 戸野美知恵君 三十一頁

紹 介

幼稚園保母を需む 三十七頁

女子高等師範學校彙報

職員異動 三十八頁
 女子高等師範學校各學科の科目及び程度 三十八頁
 寄宿舎改築 四十頁
 本校及附屬高等女學校生徒報國の美舉 四十頁

寄 書

米國割烹教室參觀記 伊藤せい 四十一頁

文 苑

思ふまゝ 春田たか 四十五頁
 紫式部の墓所と其の碑文と 關根正直 四十九頁
 皇軍の牛莊を占領したりといふことをきいて 下田鶴子 五十四頁
 故瀨川友子の君をおもふ あふち 五十四頁
 根なし草(つゝき) 松の軒端子 五十九頁
 日記の一ふし(房州めぐり)

雜 報

教育に關する 御沙汰 七十一頁
 皇后陛下及皇太子妃殿下御手製の緋帶下賜 七十一頁
 高輪御殿の兩宮殿下 七十二頁
 麻布御殿の兩宮殿下 七十二頁
 各宮妃殿下 七十三頁
 愛國婦人會 七十三頁
 海軍下士卒家族共勵會 七十三頁

女子の新職業	七十四頁
萬國婦人大會	七十五頁
大日本女子教育會	七十五頁
婦人讀書會	七十六頁
獨逸の大學と女子と	七十六頁
女子高等師範學校受験科	七十六頁
女子商業學校	七十六頁
體操學校女子部	七十六頁

櫻蔭會々報 第參號

本會記事

●第一回總會

明治卅七年七月廿四日午前八時より女子高等師範學校講堂に於て本會第一回の總會を開く出席者百三十七名なり客員飯盛町田の兩君亦暫時會場に臨する總員着席の後庶務主事吉村千鶴君登壇先づ開會の旨を告げ此の會に於ては各自其の意見希望等を腹藏なく發表せられたしと述べて降壇せられ之より左の順序により逐次進行せり

第一、庶務報告

吉村主事の報告別項の通り

第二、會計報告

會計主事下田鶴君登壇別項の通り報告説明せられたる後會費滯納の事なきやう注意ありたき旨を述べられ之に就ては各地方各學校等に會費取纏め及び送付の委員の如きものを設けらるゝなど何なりとも便宜の方法を講ぜられたしと述べて降壇せらる

第三、協議

吉村主事登壇「之より議事に移るべきに付議長を定めたりし年齢順を以て佐方鎮君に依頼しては如何」

一同贊成

議長登壇

(議長) 今日議すべき事は三ヶ條なり規則修正の事、時局に關したる事、事務所建築の事はな

り
規則は昨年茗溪會と分離の時雙方の規則に餘り異りたる處ありては分離の事困難なる事情ありしにより大概は茗溪會の規則と同様になしおけり故に修正すべき箇所あらば此の際改正して確定したし因て之に就き十分意見を述べられたし

此の時一枚摺規則書を一同に配付す

一、規則修正の件

(星常君) 第五條の東京高等師範學校は第十一條の如く舊高等師範學校と改めては如何

修正案可決

(斯波安君) 逐條議にする方よろしかるべし

(議長) 逐條議にすべし第一條は如何

原案可決

第二條より第四條まで逐次原案の通り可決

第五條は星氏修正案に決す(前出)

(辻さく君) 五條の次に十一條を入れ六條を會員客員に通ずるやうにしては如何

(小池みつ君) 元のまゝの方宜し

(村田梅枝君) 小池氏の説に賛成す

(議長) 辻氏の説に賛成者ありや

(議長) 賛成者なければ原案のまゝにすべし

第六條より第十二條まで原案の通り可決

(藤田さく君) 主事と評議員となくては事務を執ること能はざるか

(議長) 實務をするには人多くては事務散亂して纏らず之に反し評議する人少數なるときは事を誤る恐れあり因て主事は實務を執り評議員は種々の事を評議する爲に設けたるものにて畢竟會の事務を重く見たるなり一方のみにては都合なり

第十三條第十四條原案の通り可決

(星常君) 主事九名の半數改選は如何にして其の半數を定むるか

(議長) 五名と四名とを交代にす

(星常君) 主事を十名としては如何

(議長) 編輯庶務會計に各三人づつ配當するに九人の便利なり故にかく定めたるなり

(小池みつ君) 會報編輯を受持たる、方は中々多忙のやうなり故に之を四人とし主事十人としては如何

(後閑菊野君) 編輯の勞を認めらるゝ點は編輯主事として多謝する處なり但し會報は一年に三回の發行ゆゑ一回毎に主任を定むるには三人の便利なり

(議長) 庶務會計の事務も三人にて足れるが如し異議なくば従前の通り九名とすべし

第十六條より第二十條まで原案の通り可決

(小宮秀君) 第二十一條に總會を七月下旬とせ

られたるは時節よしと云ふ意なるか

(議長) 地方の人は七月下旬に上京する故に暑き時なれど止むを得ず此の時を選びたるなり他の時にては在京其の他近縣の人のみにて來會するもの甚だ少數なるべきが故なり

第廿二條より第廿八條まで原案の通り可決

(中島常君) 茗溪會より櫻蔭會へ引移りの際茗溪會に残りたるものはなきか

(議長) 無し

(中島常君) さらば廿九條の但し書は分離の時のみ必要にて永久に必要ならぬにあらざるや

(議長) 然り分離の時一時的のものなれば省きてもよし

(下田鶴君) 一時的なれども或年限は必要なり從來茗溪會員たりしものが十二年の義務完了まで之を置く必要あるなり

(田中ふみ君) 下田氏の説に賛成す

(谷田部じゆん君) 下田氏に賛成す

(小池みつ君) 入會後滿十二ケ年間と云へば櫻蔭會に入りてよりの如く解せらるべし故に但し書のある方よろし

(議長) 中島氏の説に賛成はなきか

(藤村晴君) 原案を賛成す

(議長) さらば原案の通りとすべし

第三十條原案の通り可決

(小柳ゆき君) 三十一條の雜誌の回数を毎年三回としたるは種々都合あるとなるべけれども今少し多くすること能はざるか地方のものは多きを望めり

(議長) 主事の人々も多きを望めども毎月にては事務多くて困難なり若溪會にては別に編輯員ありて相當の報酬を出せるなり傍仕事にてはむつかし元來只通信の代りと云ふ位の考にて三回と定めたるなれども諸君の意見によりては何と

か調査もすべし

(宮川しな君) 主事諸君の勞は萬々謝する處なれども餘り紙數多きときは読み切れざる故隔月位に發行せらるれば大に幸なり紙數は今の半分にてよろし

(後閑菊野君) 今までの經驗について云へば材料を集むると會務の報告を記述すると印刷の事を監督すると等三回にてもなか／＼容易き事にはあらず故に回数を多くせんには專任の編輯員を置かざればむつかしかるべし傍仕事にてする今日の處にては止むを得ず三回位にて満足せざるを得ず猶序ながら編輯主事として諸君に對し何にても寄書通知せられて會報の材料を豊富ならしめられんことを望む

(宮川しな君) 編輯の人は何人位あればよろしきか若溪會の方は如何又會計の都合は如何(議長) 若溪會は一人會員の中より採れり斯く

する時は報酬を相當にせねばならずそれは今の處にてはむつかし

(宮川しな君) 若溪會は幾何位の報酬なるか

(議長) 四拾圓なり

(宮川しな君) 會費の滞納なくともむつかしかるべきか

(下田鶴君) それはむつかし豫算に照しても出來ざること明らかなり

(宮川しな君) 隔月にするならば其れほどの報酬を出さずとも得られざるか

(議長) 隔月にては報酬は毎月出さねばならず傍仕事にて受け負ふ人あればよろしけれども

(宮川しな君) 事務所は別に作らねば不都合なるか學校にて事務は執れざるかかくすれば經濟にもよろしからん

(議長) 不都合なり學校にては書記の居る所なし書記なくては事務を執ること能はず

(松村ひさ君) 三十一條のは定まりしか否や會報の回数の多きは賛成なれども櫻蔭會は現今創立時代經驗時代なれば一二年の内は三回にて辛抱し漸次改良し又回数も増すこととして如何調査も一二年の後に譲りては如何

(藤村晴君) 其の説に賛成す
他にも賛成者あり

(吉村千鶴君) 今までのにても熟讀することの出來ぬ人あり故に創立時代にては三回のまゝにしておきては如何松村氏の説に賛成す

(宮川しな君) 否地方の人は熟讀す、調査のみにては頼みたし

(南莊廣野君) 私も調査を請ふ今少し薄くとも(谷田部じゆん君) 會費を増すとも度數を多くしたしと云はるゝか又會費は從來のまゝにて回数のみを増したしとの意か

(斯波安君) 會費を増すことは不賛成イヨ／＼

滞納者を増すべければなり

(南莊廣野君) 私も滞納者の一人なれども會費多き故に滞納すと云ふわけにはあらず地方に居りては送附の方法が聊面倒なればなり

(宮川しな君) 茗溪會と分離したる後なるゆゑ三回位にては恥し今少し立派にしたし

(瀬川すゞ君) 雜誌の回数は多くとも材料がつまりらぬものにては甲斐なし回数に三度にても材料を立派にせば宜しからん

(小池みつ君) 回数を増すと云ふ希望もよろしけれども材料なくては出来ず故に材料を寄することに努められたし材料を十分送りて三回にては載せきれぬほどにならば回数を増すもよし第一條にある通り親睦をも目的とすることなれば大なる教育事項ならずとも何にても材料となるべきことは送り試みては如何

(井口あぐり君) 賛成

(村田梅枝君) 賛成

(議長) 會費を増してもと云ふことは決をとらず調査の事につき賛成の人は舉手を請ふ

四人舉手

(議長) 少數なるゆゑ當分このまゝにすべし三回にては載せきれぬほど何にても寄書せられよ

第三十二條より第三十七條まで原案の通り可決

(小宮秀君) 第三十八條は削りては如何若し此の如きことあるときは評議員會又は臨時總會を開きて決しては如何

(田中ふみ君) 初めより何名除名になりしか

(議長) 五人許なり第十條の第二項に於て評議員會に其の權能を興へてあることなれば削除しては如何賛成者は舉手を請ふ

舉手多數

第三十八條削除に決す

二、時局に關しての件

(議長) 軍國の今日櫻蔭會にても應分の事を盡したしとして役員に於ても種々協議したることなるが獻金も經濟上困難なれば軍事公債に應じては如何會費よりは出でず基本金は整理公債なれば出来ず因て建築寄附金の中より千圓程應募しては如何建築に對する寄附金なるを以て他に流用するはよろしからざれども之は現在二千何百圓と云ふ金員あり是より後も追々寄附金あるべきことなれば後には立派なる建築も得べけれど今は出来難し公債は後に償還せらるゝことなれば今一時之を用おきて金千圓を第三回の國債募集あらん時之に應ずるものとしては如何

(小池みつ君) 櫻蔭會として盡す方法其れのみなるか外にはあらざるか

(議長) 之にはいろいろ議論あるべし實行出来てよき方法ならば何なりとなすべし

(小柳ゆき君) 私共七人許寄り集りて相談したることなるが戦後の女子の地位の下らぬやう職業を興へおくこと必要なりと思ふ故に女子に適當なる仕事を選び工場等と特約を選び仕事を興ふる事を計畫しては如何

(議長) 遺族に職業を興ふことは地方々々に篤志の人ありてすれば甚だよきことにて實行も出来得べし併し會より強ふること能はず會員中の有志者の仕事としては宜しきも會の事業としては實行むつかしかるべし

公債應募の事に賛成の方は舉手を請ふ

舉手多數

原案に決す

三、事務所建築の件

(議長) 會の事務所は現在の場所市區改正のため立退かざるべからず借家料にも限りあれば所所尋ね居れど未だ見當らず因て今假りに事務所

を建築しては如何建築寄附金中千圓は國債に應じ残り千何百圓と云ふ金を以て建築にあつることとは如何あるべきか今ならば建築費も廉なり一坪三十五圓四十圓位なるべし戦後は餘程高くなるべし

(藤田さく君) 只今建つるとすれば地所などは如何

(議長) 未だなし

(藤田さく君) 千圓位にて假事務所にて出来得べきか假事務所を建て、後又事務所を建つ時會員より金の集らぬなどの事ありては不都合なれば今は借家をなしおく方よろしかるべし

(中島常君) 只今事務所の借家料は何程なるか

(議長) 十五圓、二間を開けば二十人の評議員會を開き得る間取なり

(南莊廣野君) 申込高残らず集まれば幾何の額に上るか

(議長) 三千圓餘なり今は二千圓餘り集まり居れり

(議長) 建築することに賛成ならば役員に全權を委せられし來年の總會まで待ち報告して後建築にかゝる事としては間に合はず然し借家の方よしとなれば借家ともすべし

(小田切ららの君) 東京に居るものより考ふれば事務所のある方非常に便利なれども地方のものより考ふれば學校内にもよかるべしと思ふ位なり家賃を拂ふと千圓餘を以て建築すると何れがよきか經濟上宜しき方に賛成すべし

(議長) 其れ等の事は未だ調査出来ず建つる方よかるべしとならば調査すると云ふ次第なり

(小田切ららの君) 今建つる方經濟ならずは當分借家しおきて後に規模を大にして建てたし何れにても經濟に適へる方にしたしと思ふなり
(宮川しな君) 建築寄附金は今如何なり居るか

(議長) 千五百圓は定期預五百圓は當座預として共に第二銀行に預けおけり

(宮川しな君) 利子の點より考ふれば建つる方經濟なるべしと思はるとにかく調査を請ふべし然る上經濟に適へる方にせられたし

(議長) 調査の上經濟上よき方に著手することの評議員に委任せらるるか

多數舉手

原案可決

右にて協議全く終りたれば直に評議員半數改選につき投票を行ふ

在京會員の姓名は豫め之を場内に掲示せり

第四、評議員半數改選

投票の結果左の如し

六十二點 神通 せき 五十九點 西島 富壽
五十五點 十文字 こと 五十二點 小田切ららの
四十五點 辻 さく 四十四點 塚本 濱

四十三點 高木 みつ 四十點 穂積 ぎん
三十四點 矢作 てつ 三十二點 武田 貢
以上當選者

三十二點 星 常 三十一點 小池 みつ
二十八點 波多野 徳 二十四點 斯波 安
以上次點者

●總會懇親會

總會の全く終りたる時恰も正午なりければ直に會員を懇親會場(附屬高等女學校裁縫教室)に導く是より先き客員諸先生も來會せられたれば講堂後手の室并に藤棚下に設け置たる席に著かせ參らせて茶菓をす、ひ井口主事接待の任に當る會員全く著席の後主事數氏の先導にて客員諸君會場に臨まる當日來會せられし客員は萩野、岡田、神田、中川、山川、町田、小西、三宅、篠田、岩川、下村、森、武村、飯盛、神保、關根の十六君會

員の出席者は百三十七名にして會場狭きにあらざれどもまた一席をも餘さず中央なる客員席の四方に緑の紙もていと長やかに下げられたるは日蔭のかづらのおもかげ見ゆ卓上の花瓶には美しき草花を挿されたり席定まりたる時吉村主事の挨拶ありそれより佳品珍味つきく卓に上れる時會員小柳ゆき君立ちて其の任地高知の土地柄またそこに住める人の心のうるはしきふしなどをこまやかに紹介せられ客員會員諸氏に來遊を望むよしを述べらるけふ會員の席次は(東一)(西二)(南二)(北六)など記せる籤によりて定められたれば四方の席に新舊の卒業生打ちまじりて白き髪のみじれるが隣りに若やかなる人の居たるもをかしくさてかたみに名のりすればやがて十とせも交りけん人のごとく打ちとけて物語りするさま同窓の親しみはかくてこそといふたのもしげなり食事終りたる後餘興として薩摩

琵琶の演奏二曲ありこれより藤棚下に移りてここに設けたる腰掛にかゝるもあり歩みながら語るもありかたへなる體操場に入りて舞踏するもあり處々の卓上には越のみぞれ雪形あられなど涼しげなる名の菓子くさくありまた苺のシロツブもて色つけたる氷水を大なる瓶に入れたるが置かれたればそがあたりを憩ふもありて午後五時に近きころまで留れるも少からずげにおもふとちまとゐする日は唐衣たまく惜しきものなりけりかくて役員の人々の事執り終へて學校を出でしは六時過ぐる頃なりき

●第一回庶務報告

(自明治三十六年九月
至同三十七年六月)

一會員總數七百四拾九人

内

若溪會より引移りし者 五百九拾壹人
新入會員 百五拾四人

退會者

壹人

死亡

參人

一現在會員總數七百四拾五人

内

東京會員

百九拾六人

地方會員

五百參拾八人

在外國會員

拾壹人

一客員總數四拾參人(男參拾六人
女七人)

内

東京

四拾貳人

地方

壹人

一集會度數貳拾七回

内

主事會拾壹回

臨時主事會參回

評議員會八回

會員集會五回

一會報印刷總數千六百八拾四部

内

納本、贈呈、交換 八部

●第一年度會計決算報告

(明治三十六年八月より
同三十七年六月に至る)

會員、客員へ配布 千五百四拾貳部
一書籍總數百九拾部 六百五拾冊
一器具總數參拾九種 百五拾九點

一金六百五拾壹圓拾五錢九厘

總收入高

内譯

金六百拾圓六拾四錢參厘

會費收入

金四拾圓拾五錢六厘

雜收入

金參拾六錢

預金利息

一金五百八拾貳圓六拾參錢參厘

總支出高

内譯

金參拾六圓七拾錢八厘 創立費

金貳拾圓九拾六錢五厘 會議費

金拾五圓九錢五厘 集會費

金六拾六圓九錢五厘 給料并ニ手當

此内金六拾五圓 書記給料

金壹圓拾五錢 手當

金五圓七拾八錢 車代及使料

金五拾七圓九拾貳錢 郵便稅

此内金五拾圓五拾八錢 雜誌送料

金貳圓貳拾五錢 集會通知端書料

金五圓九錢 雜用

金七拾五圓 借家料

金貳拾六圓八拾貳錢 雜品費

此内金七圓九拾五錢 器具費

金拾七圓貳拾九錢 筆紙墨費

金壹圓五拾八錢 炭茶費

金參拾參圓 吉凶及慰勞贈與費

金參圓九拾五錢 印刷費

金貳百拾參圓八拾錢 雜誌費用

金貳拾七圓參拾四錢五厘 雜費

一金六拾八圓五拾貳錢六厘 翌年度へ繰越金

内譯

金四拾圓參拾六錢 當座預金

金貳拾八圓九拾六錢六厘 現金

●櫻蔭會規則

第一條 本會ハ會員相互ノ親睦ヲ圖リ併セテ教育上ノ事項ヲ研究スルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ櫻蔭會ト名ツク

第三條 本會ノ事務所ハ東京市ニ置ク

第四條 入會セント欲スルモノハ族籍住所氏名職業等ヲ記シ其旨ヲ本會ニ申込ミ承諾ヲ受クベシ

第五條 會員タルヲ得ルモノハ舊東京女子師範學校舊高等師範學校女子部及ビ女子高等師範學校ノ卒業生ニ限ル

第六條 會員ニシテ住所氏名業務等ヲ變更シタル時ハ其旨本會ニ届出ヅベシ

第七條 退會セントスルモノハ其旨本會ニ届出ヅベシ

第八條 會員ハ地方學事ノ景況及教育上裨益トナルベキ記事等ヲ本會ニ寄贈スベシ

第九條 會員ハ主事會及評議員會ニ出席シテ意見ヲ述ブルコトヲ得

但シ可否ノ數ニ加ハルコトヲ得ズ

第十條 會員ハ左ノ事項ニ依リ其資格ヲ失フ

一 任意退會

一 評議員會ノ決議

一 死 亡

第十一條 舊東京女子師範學校舊高等師範學校女子部及女子高等師範學校ニ關係アル諸氏ヲ請テ客員トス

但シ評議員會ノ決議ヲ經ルモノトス

第十二條 本會ノ事務ヲ處理センガ爲メ主事九名ヲ置ク

主事ハ評議員會ニ於テ東京市在住ノ會員中ヨリ選舉シ其任期ヲ二箇年トス

第十三條 本會ニ評議員二十名ヲ置ク

評議員ハ東京市在住ノ會員中ヨリ總會ニ於テ選舉シ其任期ヲ二箇年トス

第十四條 評議員會ニ於テハ規則ニ定メタル事項及其他重要ナル事項ヲ議定ス

第十五條 主事及評議員ハ毎年其半數ヲ改選スルモノトス

第十六條 主事及評議員ハ任期滿限ニ至ルモ後任者就職スルマテハ尙其職務ヲ繼續スルモノトス

第十七條 主事ハ書記ヲ雇入ルヲ得

第十八條 評議員及主事ノ選ニ當ル者ハ已ムヲ得ザル事故アルニ非レバ辭スルヲ得ズ

但引續キ當選スル者及三期以上其任ニ在リタル者ハ此限ニアラズ

第十九條 本會ノ爲メ特ニ盡力シタル者ニハ評議員會ノ決議ヲ經テ報酬ヲ贈ルコトアルベシ

第二十條 臨時調査ヲ要スルコトアル時ハ評議員會ニ於テ調査委員ヲ選舉シテ委托スルコトアルベシ

第二十一條 總會ハ毎年七月下旬ニ之ヲ開ク

第二十二條 評議員ノ決議又ハ會員參拾名以上ヨリ請求アル時ハ臨時總會ヲ開クモノトス

第二十三條 總會ヲ召集スル時ハ一ヶ月前ニ告知スル者トス

第二十四條 總會ノ議事ヲ整理セシムル爲メ每會議長一名ヲ選舉ス

第二十五條 總會ニ於テハ前年度ノ會務ヲ報告シ評議員ノ選舉及教育上ノ談話ヲナシ又ハ規則ノ改正其他本會ニ係ル重大ナル事項ヲ議決ス

第二十六條 總會ノ決議ハ出席員過半數ノ同意ニ依ル

總會ニ出席セザル會員ハ書面ヲ以テ可否ヲ表スルヲ得此場合ニ於テハ出席員ト見做ス但代理人ハ之ヲ出スヲ得ズ

第二十七條 主事會評議員會ハ毎月一回之ヲ開クモノトス

但時宜ニ依リ臨時會ヲ開クヲアルベシ

第二十八條 評議員會ハ評議員半數以上出席スルニアラザレバ開會スルヲ得ズ

第二十九條 會員ハ本會ノ經費ヲ支フル爲メ會費トシテ入會後滿十二箇年間一箇月金二十錢ノ割ヲ以テ釀出スベシ

但從來若溪會會員タリシ者ハ會費ニ關スル權利ヲ繼續スルモノトス

第三十條 前條ノ會費三箇年分以上テ一時ニ前納スル者ハ一箇年金貳圓ノ割ヲ以テ釀出スベシ

第三十一條 本會ハ毎年三回雜誌ヲ發行シ會員及客員ニ配付スルモノトス

第三十二條 本會ノ經費ハ會員ノ釀出金基本財産ノ收利其他ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

但寄附者ニ於テ其使用ノ目的ヲ定メタル寄附金ハ此限ニアラズ

第三十三條 本會ノ會計年度ハ其年七月一日ヨリ翌年六月三十日マデトス

第三十四條 豫算外ノ支出ハ評議員會ノ決議ヲ經ルヲ要ス

但出席員三分ノ二以上ノ同意ヲ得ベキモノトス

第三十五條 本會ノ收支豫算ハ前年度六月三十日マデニ評議員ノ決議ヲ經テ之ヲ定メ其決算ハ翌年度七月三十一日マデニ評議員會ニ提出シテ其承認ヲ受クベシ

第三十六條 本會ノ基本金ハ公債證書債券若クハ株券ニ代ヘ又ハ確實ナル銀行ニ預ケ置クモノトス

但公債證書債券及銀行ノ選定ハ評議員會ノ決議ヲ經ルヲ要ス
毎年度ノ決算殘餘金ハ次年度ニ繰越又ハ基本金ニ加入スルモノトス

第三十七條 規則改正ハ會員三十名以上ノ同意ヲ得ルカ若クハ評議員會ノ決議ヲ經ルニアラザレバ總會ノ議題トスルコトヲ得ズ

●決議要項

明治三十七年六月以後主事會五回評議員會四回開會(臨時共)決議せし事項大要左の如し

- 一、會計豫算の事(別項參照)
- 二、總會の準備に關する諸種の事件
- 三、本會創立委員十名に慰勞の爲め物品を贈る事

四、主事當番は評議員會に出席の義務あるものとし他の主事もなるべく出席すべきものとす
評議員會に於ける議長は同會にて適宜の方法を以て定むる事

五、評議員會の通知狀には其の時即決し難き問題あらばなるべく丁寧に記載する事

六、主事退職者へは退職の都度謝禮を行ふ事

七、退職主事井口、波佐谷、佐方、野口、四名

に對し物品寄贈の事

八、會費滯納壹箇年をこゆる時は注意を加ふる事而して三箇年以上滯納なるときは評議員會に附したる後催促する事

九、客員推薦は毎年三月に行ふ事

十、事務所新築調査委員は評議員會に於て投票を以て定むる事其の人員を五名とする事

十一、各地方の會員中に就て會費送附の委員を定め之を本會より委嘱する事

●會計豫算

櫻蔭會第二回豫算 自明治三十七年七月至同三十八年六月

收入

一金千七百四拾圓六拾貳錢六厘也

内譯

一金六拾八圓五拾貳錢六厘

前年度繰越金

一金四拾貳圓五拾錢

公債利子

一金千四百九拾貳圓六拾錢也

内譯

一金四拾圓八拾錢

會議費

主事會評議員會拾貳回宛臨時主事會五回臨時評議員會五回延人員主事百五拾參人一賄金貳拾錢評議員三百四拾人一賄金參錢宛ノ見込

一金百拾壹圓八拾錢

集會費

此ノ内金拾九圓貳拾錢

總會ノ節主事九人賄料金七圓貳拾錢雇人料金貳圓餘興費金拾圓ノ見込
 金九圓貳拾錢
 死亡會員祭典ノ節主事九人賄料金七圓貳拾錢雇人料金貳圓ノ見込
 拾錢雇人料金貳圓ノ見込
 金貳拾九圓貳拾錢
 新年會ノ節主事九人賄料金七圓貳拾錢雇人料金貳圓餘興費金拾圓席料金拾圓ノ見込
 金參拾九圓貳拾錢
 入會懇親會ノ節主事九人賄料金七圓貳拾錢雇人料金貳圓餘興費金拾圓席料金貳拾圓ノ見込
 金拾九圓
 送迎會二回被送迎者一回ニ付凡ソ貳人ノ見込此ノ賄料金貳圓雇人料一回ニ付金壹圓席料金拾圓ノ見込
 一金百八拾圓 書記給料
 一金參拾圓 車代及使料
 一金百六拾貳圓 郵便費
 此ノ内金九拾圓 會報送料
 金拾貳圓 集會通知端書料
 金六拾圓 雜用
 一金百八拾圓 借家料
 一金貳拾圓 器具費
 一金拾五圓 筆紙墨費
 一金拾貳圓 炭茶費
 一金參拾貳圓 吉凶及慰勞贈興費
 會員客員死亡ノ節吊慰及役員慰勞慶事贈興費
 一金拾圓 圖書費
 一金貳拾圓 印刷費
 一金四百八拾圓 會報費
 此ノ内金四百五拾圓 會報及名簿印刷費

三回分通シテ貳千八百部一部凡ソ拾六錢ノ見込
 金參拾圓 寄稿料
 一金拾五圓 速記料
 一金參拾圓 市内會費集金料
 一金五拾圓 雜費
 一金百圓 豫備費
 一金貳百四拾八圓貳錢六厘也 翌年度繰越高

●本會役員

評議員 總會に於て行ひたる評議員半數改選に當選せられたる人々は何れも其の就任を承諾せられたり評議員氏名左の如し
 平野 後 佐方 鎮 野口ゆか
 井口あくり 吉村千鶴 尾田けい
 下田 鶴 大羽 久 松村 久
 後閑菊野 (以上留任者)

神通せき 西島富壽 十文字こと
 小田切うらの 辻 さく 塚本 濱
 高木みつ 穂積 銀 矢作てつ
 武田 貢 (以上當選者)
 主事 七月中の主事會に於て抽籤を以て主事の留任者を定め總會後の臨時評議員會に於て主事半數改選を行ひたり其の結果左の如し
 波多野 德 後閑菊野 吉村千鶴
 平野 後 下田 鶴 (以上留任者)
 佐方 鎮 野口ゆか 西島富壽
 春田 隆 (以上當選者)

主事分擔左の如し

編輯 春田 隆 波多野德 後閑菊野
 庶務 野口ゆか 吉村千鶴 西島富壽
 會計 佐方 鎮 下田 鶴 平野 後

●事務所新築調査委員

總會の決議により事務所新築調査委員を定めん

がため九月十八日評議員會に於て投票を行ひ左の諸氏當選せらる

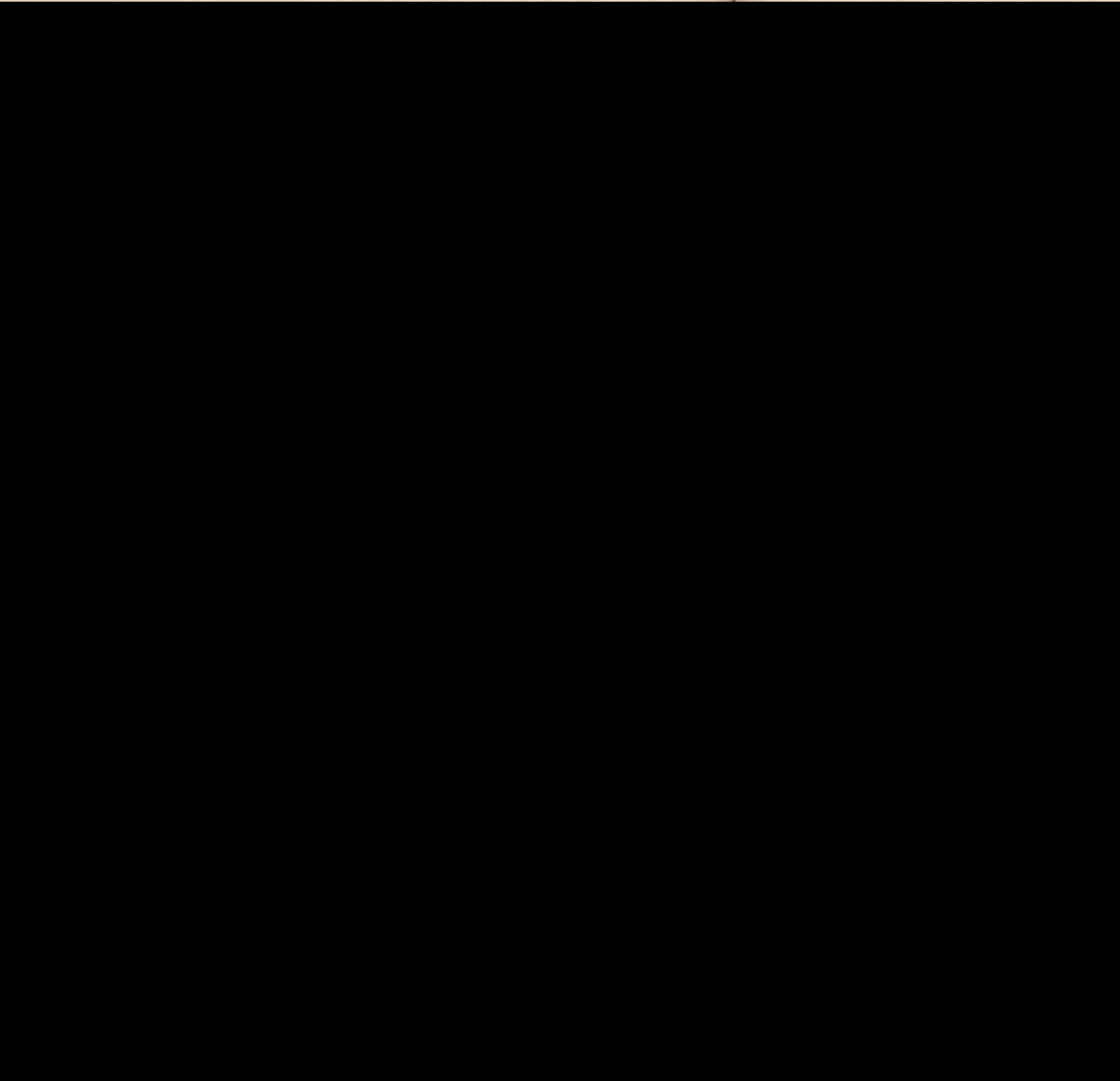
岡田 徳 春田 隆 佐方 鎮
下田 鶴 後閑菊野

●創立委員への慰勞

櫻蔭會創立委員諸氏は茗溪會より分離以來最も

熱心に之が任に當られて能く其の基礎を据ゑられ爾後改訂校正して漸く其の緒に就くを得たり由て本會は特に此等諸氏に對して感謝の微意を表せんがため去七月總會の席に於て扇子並にハシカチーフを贈呈せり

客員會員の動靜



入會

退會

通信

仰にしたがひ何か面白い御通信をと思ひますが一向思ひつきませぬ故現今の住所札幌のことにつき一言申上げて其責をふさぎます

私の渡道いたしましたのは去ぬる五月の半北海道の名物なる雪はさながらあたくなく消え花わらひ鳥うたふ好時季でありましてしかも今尙其好時季をつゝけて居りますことゆゑお話は多く好時季の經驗と思召下さる

札幌は御承知の通り石狩平原の中央にある一都會にて西には圓山藻岩山手稻山などが屏風の如く横はつて居りますが他の三方はうち開いた平野で豊平川は其東南を流れて居ります。

市街は大通りといふ廣い半公園半街道を以て赤道とし創成川といふ河を以て經線の基とし南北は南何條北何條といふ様に條を以てかぞへ東西は何條の東何町目とか西何町目とかいふ様に町を以

て遠近を知る様に區劃せられ幾何學的に出來て居ます。道路の中は至て廣く數多き電線の縱横にかゝつて居りますので電信電燈電話等凡て電氣力の利用も充分されて居るとを示して居ります。さうして家屋の構造は一寸内地と異つて居りましてどんな小さな家でも表は大抵玄關、窓の具合などが西洋風に見えて裏は日本風の椽側つきになつて居ります、が雨戸は總硝子半硝子中硝子等にて板ばかりで張つたものはなく冬期はこれを開けさせん商家の店先きなども皆硝子戸のなきはなく硝子はよく利用されてありますさうしてどんな小さな長屋でもストーブのパイプのホールの設備は必ずしてございます、又全く西洋風の家も少なくありません材料は石煉瓦もまゝ見えますが多くは木材でカツラ、センノ木等が多いのですどうもこちらの材木はくるひが出てこまると申すことです。

屋根は瓦葺は極めて少なく大なる家はトタン葺ですが大抵は板を以て葺てありますこれは當地の様な乾燥した土地には火の用心がごく悪いためにも、大火があるところから今は屋上制限令が出て向五年の内には皆瓦かトタンになるといふことですさうしたら市街の體裁もよくなりませう、ともかく當地に參つて其市街を一巡したところでどうしても小村落が發達したものとは見えません餘程規模の大きな市街を設立せんと企畫したあとはあり／＼と見えて居ます夫れは偶然では無い御承知の通り維新の當時政府はこゝに開拓使なるものを置かれ黒田伯が其長官となつて西洋人

などを顧問におき此北海道開拓のことに盡力せられ札幌は其中心として亞米利加の市街にならひ非常に宏大のものを作る計畫であつたのです然るに種々の事情の下に開拓使は廢せられ其計畫の實行は中止せられたのであたら初めの企畫ほどの發達を見ないとのことでございます（今大通に黒田伯の銅像開拓使の紀念碑あり）まかし北海道の眞中にこんなところがあらんとは一寸思ひ付きませんでした。

開拓使時代から北海道の高等教育の中心として建てられよほどの歴史を持つて居る學校は札幌農學校で今より三十年前の設立にかゝり其間には當に農學専門の人士のみならず文學政治等に於て知名の人士を出したことは少なくない本邦の教育界に一種の異彩をはなてる學校であります今度三十萬圓ほどの費用で新築になり札幌の西北に移りそこに廣大なる土地を有し多くの農場農園博物館等を附屬としなかく廣い學校ですが防寒用には最新式のウエーバー式の暖房機關が備つてゐて蒸氣室から地中の管へ蒸氣を送りあちらこちらに散立して居る多くの建物の部屋々々をあためて冬を知らぬといふことです其課程は中學卒業生が豫修科二年を修め本科に入り本科の修業年限は四ヶ年にて卒業の後は農學士となるのです本科の外に土木工學科森林科農藝科といふが置かれてあつて一時は工學士をも出したさうです志願者は全國から澤山あつまると申ことでございます。随分札幌も昔とは變つて居て二十年程前には今私どもの居るところから四五町も行つたとこ

ろの河(今は池の如く其の一部をのこすのみ)で下女が米をとき歸りがけに鮭の二三本もつかまへて来たといふことです。

當地の空氣は乾燥して居て物の腐敗は遅く土地は至て肥沃で植物繁茂のさまは心地よきまでございませぬ當区内に最も多く目にふれますのは喬木ではセンの木、ニレ、ラクエウシヨウ、オンコ(イチイ)果樹ではサクランボの木、西洋林檎、和洋の梨、葡萄等にてことに八月の初から今頃にかけてすこし大きな家の構内には累々たる紅の玉をかけた林檎の枝が重げにしだれて居ります植物中には西洋から輸入したのも随分多くかぞへきれぬほどです、が有りふれたものを申せば林檎、梨、葡萄、南瓜、玉葱、馬鈴薯、キャベツ、グースベリー、カーレンツ、トマト、キビの類で其他内地より持ち來りし植物は大抵收穫があると申ことです。

かく材料のあるにつれ興るのは工場での札幌麥酒會社を始め木工場、製粉場、製麻會社、精米會社、葡萄酒醸造場等の烟突は区内に盛に黒烟を吐いて居ります。養蠶も近頃はなか／＼盛にいたして居ります。こゝに又一ツ内地と異つて興味あるのは五月頃の光景で私が當地に參つた頃庭の一隅には梅櫻の盛は少し過ぎたれどもなほ見どころある其側に梨、林檎、小米櫻などの雪をあびむくまでに咲きはこり垣には山吹はた池の汀のあやめ、水仙、藤、芽ざしの紅葉、つゞ其他くさ／＼の西洋花のまだ散りも終らぬに牡丹芍薬ははやほころびそめ恰かも四季の花を染めいだせる友染縮

緬かなどの様に見えましたまかし嵐山十津川の様な優美のけしきは餘りありません一寸散歩にでも出て見渡しますと野邊にはいたるところクロヴァー、ティモセ等の牧草がみごとに生ひまげり幾星霜を経たりとも知れぬニレの大木は威風凜々として今尚ほ榮えて居る其下に牛や馬が餘念もなく牧草をあせつて居るさまはまるで油繪にでもありさうでございます。

人情風俗と申してはまだよく研究もいたしませんが一體當地の住人の多くはつとめ人で其供給をみたすために商家があるといふ有様ゆゑ函館小樽等とちがひ至て質素な上品な處で生活の状態は大抵和洋折衷といふ風をとつて居られなか／＼内地の地方には得られぬところがあります御承知の通り北海道の土人アイヌは僅少數で今は餘りすがたも見せぬ位其他は皆移住した人ですから此土地固有の舊習といふ様なものはなくさうして早くから當地あたりに來る人はちと冒險的の處もあるがよく申せば進取の氣性に富んだ起業的人物が多いゆゑ油斷のならぬところもあります考がさばけて居て廣い様に思はれます一例を申せば女子が袴を着ませうが自轉車に乗りませうが左様のことには氣もとめぬさまでございます夫れで奥様たちも上品ではありませんがなか／＼活潑で随分思ひ切つたことをなさると申ことでございます勞働者の衣服は男女ともに多く筒袖でございますがこれは重に氣候の方から來たものらしく家屋の構造と申しこれらのことが餘程西洋風でございますこれによつて歐洲の生活状態は氣候に大關係のあると申ことが考へられます氣候と申

せば當年の夏は十六年以來ない暑さであつたと申こととでございますがそれでも東京などにくらべますと暑さを感じぬと申ても宜しい程で一兩日中九十二度位のとがあつたのみでございます。まづ本邦では最上の避暑地と申てよろしいかと思はれます冬になりましたらまたお話の種もありませうがそれは又経験した上で申上ます。

衣食住に必要な物品は東京にあるだけの物は何でもありまして不自由はいたしません。かか田舎廻しといふ品でなく随分よいものが參つて居て美といふ點もなか／＼發達して居ります。其かはり物價は高く經濟上から申せば暮しよい處ではありませぬ。かかし冬期寒いにもかゝらず健康にはよほどよい土地ださうでございます。

教育上のことは其局に居らるゝ會員の方から御通信もございませうから私はかきません。

餘り長文になりますから此度はこれで筆をとめます

九月六日

札幌 中 島 敏

櫻 蔭 會 御 中

拜啓

其後は益御機嫌能入らせられ候御事と賀し奉り候さて當校も愈本月二日より開校と相成日々勤務致居候間乍憚様御安心なし被下度候私の試に計畫致したる當校組織は年齢七歳より十歳までを豫

備科として丁度尋常小學位の教育を與へ十歳より十五歳までを學校の本體と致し高等小學二年と高等女學校三年程度のもとを合併致したる様な工合に致置候處當郡女子の教育誠に後れ居り候ために教育の有様の非常に異りたる者入學致し其分類に甚困難致し居候、

當時の生徒數は十八名にて年齢は六歳より十七歳まで從來の教育は外國人の學校にて多年教育を受けたる者、又は小學校教育の幾分を受けたる者、又は教育の皆無なるもの等にて姉妹三人同級なるものも有之、六歳の子供も十一二歳の者も共に同一授業を受くる有様にて人數の少き割合には實に教授に困難を感じ申候、

生徒の父兄は皆當地にて身分ある人々にて年長者三人は宮中の官女の如き者にて皇后陛下より遣されしもの、東宮の侍従長の女と、舊陸軍次官の女などに御座候、其他の子供の父兄も 陛下の侍従武官長にて候爵某の女二人、宮内次官の孫女二人、文部次官の女二人、地方長官の女三人等にて何れも上流社會の女子のみに有之候、熱帯國民の割合には熱心に勉強致し候、午前九時より午後三時半まで授業致し候之は私の理想には無之候へ共、當地の風も有之候事故、校長とも相談の結果一般の風に從ひ申候、

學科の如きも其素養の差異著しく、英語の如きは非常に優等なる者有之、年長者には全く英語を用ひ居り候得共十分了解致し申候、父兄の中にも英語を解する者甚多く、助手(シヤムの婦人)の如き

能く之を話し申候、之が爲め、七歳の子供より年長生に至るまで一週六時間の英語を課せん事を校長より請求せられ、其通りに致し居り候、當地の教育は讀書が出来、外國語が話せ、刺繡、造花の如き技藝が出来候は、上流婦人として十分なりと考ふる傾有之候風故、英語のことも可成會話し得る事を主眼と致し授業致し居り候が記憶のよきには實に驚き入り申候、學力の尤劣りたるは數學にて大抵は分數迄しか存じ不申、十四五歳の子供にても加減乗除の應用問題を解し得ぬ者甚多く、從て當校一年生の如きは加減乗除の應用問題を課し居り候、

地理歴史理科等の觀念は皆無にて、私は強て當國の地理と歴史を課し、校長に授業を托し居り候、十六七歳の女子にても「バンコック」の外には地理上の觀念殆なきがごとく、從て其興味の範圍誠に狭く、他國の寫眞等を見せ話致し候ても之に對する興味甚少く見受け申候、技藝は尤好む處にて從て巧に御座候、豫備科生徒に手工を課し居候大喜びにて、如何なる時間も之を爲さん事を望み申候、併し珍しき事に一時の注意を向くる事非常なる割合には困難に打勝ちて一事を仕遂ぐるの性を缺き、誠に厭さやすき不實著なる性質を有し居り候、夫故當時は學校に來る事を非常に樂しみ居り候得共三年の後は此中の幾人が残り居り候哉と氣遣しく存候、當時は成るべく生徒をして學校を樂しましめんとするの方針を取り、學科のごときも可成は其嗜好に應ずる様勉め居り候、生徒の服裝の立派なるには實におどろく計りにて、衣服は夏服なれば皆木綿類には候得共、金銀寶

石を澤山裝飾と致し、年長者のごときは金時計はおろか、「ダイヤモンド」「ルビー」等の指輪、トメ針、腕輪澤山に着け居り候は外國にも其例を見ざる處に御座候、此氣候生活の狀態にて眞に實着なる女子をつくらん事は中々困難なる業なるべしと存ぜられ候、私共は東洋人なると、ことに當時露國と戦うて連戦連勝の勢なる日本人たるとの故にて、父兄は勿論文部省の人なども中々同情を有し學校の隆盛を祈りくる、人々も澤山有之候は實に幸なる事と存候同行者二人も健全に勉強致し居り候間、校務も徐々に進行致し可申と信じ居り申候（下略）

四月十一日

安井哲

同級生 御中

ある人年始狀は暑中休暇に出すといひしを笑ひしが實にさる事もありけるよ今年の正月は轉宅（極月廿九日）のさわぎと出産とにて手紙にてと思ひし分は一も出さざりけり諸姉に對して何とも申譯なし何卒海量（ハイヤ）もて許させ玉へ。

正月十四日に男兒分婉名を清とつく、長崎よりわざ／＼産婆呼びよせつるなり其不便さ御察し下され度候他の人は皆歸國して出産するを例とす以前當地にて産せし人ありしが不幸にして小供も親も程なく死去せりこれは支那の産婆（催生婆と名く）があしかりし爲か或は養生の行届かざりし爲か又は二の原因の外に原因ありしか其は知らざれどもとにかく、る事もありて恐怖心もあり

又實際の事情も許さぬ爲め歸國の事となるるべし。幸私は母子共健全今は清は齒もはえ初め成長其他の兒に比して早き様存せられ候まさかあつき地に生れし爲めにもあらざるべけれど今は随分暑きが安井姉のサイアムに比べては小言は言へずと存候同姉の今頃實に思ひやられ候、

學校も漸く舊一月十五日に開校は幼稚園の方のみにて舊二月四日に保姆速成科の方開校（同じ校内にあり）保姆科始まりし後は幼稚園の方は監督のみにて實際に手を下す暇なくなり候、幼兒は八十名保姆人少なき爲め二組に分ちて致し上の組は小學校同様下のが幼稚園の一の組位に候保姆科は七十二名ありて一組にて授業し随分初は困り候、幼兒も随分初めのうちは言葉わからぬもの故大骨折れ保姆科のひらける迄に少し目位つきまだ鼻と迄は參らざりしが大によくなり申候、この頃は通譯が毎日參りしが保姆科初まりて後は幼稚園の方は參らずなり又其人の都合にて間もなく保姆科へも出ずなり申候、幼兒も初は随分滑稽なりしが今は大分よくなれよほど致よくなり申候、どこも人情に變りはなくこどもは愛らしきもの先生オハヨーなど申候、

毎日私登校すれば轎を出るを待ちかね笑みかたひけて禮など致し候幼稚園保姆は丹及び武井と申す人、丹は大阪の女學校にありて保姆傳習科を卒業せしもの春田たか子氏や明石いし子さんなどの生徒、武井は東京高女の生徒星さんや牧さんの生徒なるが此の二人が擔任し別に一人助手として丹の姪を使ひ候丹は永年幼稚園に従事せしが武井は小學校のみ、其れ故武井を上組の受持とし

多く小學校的にして幼稚園のことを少しませ、丹には純粹の幼稚園的にして下の組を持たせ居り候而して私は保姆科を教へ居り候初めは東語（日本語）のみ一週十二時間程教へ居りしが教例なく通譯なき爲め間もなく東語の外に修身、家政、保育を入れ凡てにて十一時間受持他の二人に音樂と體操と算術とを持たせ時々行きては參觀し批評しなど致し候私受持の修、家、保の外に通譯はこず随分不都合に候、保姆科には尤外に中國の教習ありて（教習は教師のこと）中文、地理、歴史、圖畫、習字を教へ居り候夏休以後よりは理科を加ふる筈に候生徒の年齢は十五六歳より卅歳以上（規則は三十以下との事）迄もありて學力不一樣、中々授業は困難に候中には親子共に保姆科に入れるものあり其熱心寧ろ感ずべきもの有之候中には學問（漢文の力）あるものも有之候多くは熱心にて新智識を得るに汲々たる有様頼もしく存せられ候而して此れ等學生は皆衣服を給せられ食事は朝晝の二度學校より食せしめ學用品は凡て學校より給與しなほ轎代車代として毎月一人貳圓を給せられ候、幼稚園の幼兒もなほ衣服を給せられ候、西太后がひらけぬ故女學校としては開設する能はず云は、内證にて幼稚園のうちに女學校を置けるわけに候、この保姆科やがて將來師範學校の基礎たらしとする様に候一年卒業のわけにて卒業後更に四年の師範校ある筈になり居り候體操は足の小さき爲め大になんぎ今は二三人の外は放足致しまとひある布をとりて大きなくつをはき居候其れにても無論あるくことはなんぎにて實にきのどくの様に候併し放足せし故に三十分位の運

動は出来申候喜んで遊戯致し候、音楽も實にひどきものに候少しはよくなりかけ候、東語はかれ等外國語といふ事と一は幼兒より暗誦には慣れしあたまたる故とにや非常の業を以てけいこ勉強致し能く覚えはやくす、み候一はかれ等が臆面なく何でも一つならへば一つ應用する、いふて見るといふ氣風あるにより進歩速なることかと存候中々支那人は交際上手にて酒宴の席などうまくす、める事巾内にはかりゐて引込める人とは思はれぬ程に候、幼稚園のこともなどでも巾上上手に候、幼稚園では唱歌に困り、私が漸く四つ許りつくり間に合はせ候遊戯のつける唱歌にて雁其他二を譯して少しかへ(聲音の工合により多少譜もかへねばならず)又一は新に作りて水鐵砲の譜に合せ少かへて試み候又夏休後に用ふべきもの作らねばならず候どうせよいものは出来ずまわ(次第)に進むより外致方なく候初め雁(支那語)すみし後風車を日本語にて教へ候處無意味にて遊戯に致候得ども餘りに不愛想故あとの三を作り與へ候喜び(てヒライタ) (開々了)と申て愉快にうたひ其他も實に心から嬉しさうにうたひ候

保姆科の生徒中五六人は日本に留學せんとするものあり又學科以外にいろ／＼日本より購求してかけある繪畫につき質問など致し時々は十五分の休時間を立ちすくみにあふ事もあり候、女學生の半數は人の妻半數は娘に候、前者は太々(オクサンノ意)後者は姑娘(娘の意)と申候雷遊びや場とり、はた後藤先生のおすきなりし考へ物の遊など教へやり候處喜候何分にも言葉が自由なら

ぬもの故誠に不自由に候中々いふ事が聞きとれず(本地音にて北京語にあらず、北京語にても中々わからぬ處へこの土語故困り候)此頃は生徒もや、なれよほどゆつくり申しくれ候へども字の助を借らねばわからぬ事多く候、私の時間通譯の無き時などには半ば話し半ば板書しやつと意の通ずる位のもの、通譯なしに話せればどんなに面白く教授が出来るかと思ひ實に残念に候、東語の時は通譯なし故思ふまゝに教授出来實に愉快生徒の方でも面白がり候様子に候何か一つ話さんと思へば普通の智識なき故其のものともから話してかゝらねばならず随分まどろしきものに候今の幼稚園のこともが成人する頃には清國も漸く一人前になれる事にや、廣き國故随分立派なる考をもてる人もある様なれど中々むづかしき國故うまく意見の通るわけにはゆかず併し金は澤山あり金持は随分大きなものが澤山あり一寸學校の寄附金でも一人で千圓(日本の知事相當の人)位何のさうさもなしに出す商人などは學校でも新設するといふ場合には五萬位の金は年々出す何でも事が大きく國の貧富は知らねど個人としての富者は随分多き様に候其の代り貧者も又中々多かるべけれど生活のたやすき爲めさう困りもすまじ。

本年生れたのをませて四人の小供は(上二人は名古屋にあり)日々壯健上三人は何やらかやらし日々遊候併し日本へ歸りたいなり、日本がよいなりなど時々申候、支那語を大分覚えボーイ來(コイ)拿開水來(湯ヲモテコイ)とか我很喜歡這伺(私ハコレガ大變スキデス)など其他いろ／＼

と申し又支那の號令かけて兵士のまねなど致候、こどもの事を考へれば中々ながくかゝる處に居れず候まして在日本の小供の事など考ふればなほさらに候、支那人は實にむづかしく未だ嘗て覺えぬ非常の苦勞(氣苦勞)致し候すべて外國にある身はかゝるものに候べけれど一知半開の人々に交はるには中々骨折れ申候、校長も監督も日本にゐし事ある人故よほど外の學校から比べると日本的なり割合に日本人も多し日本人の思ふ様になる事も多けれど又其の日本の形式丈見て眞想を知らぬ爲めに中に困る事もあり、人はよき人共なり。

長年御ふさたしたかはりにむしやうになが／＼と認め殊に亂筆にて御よみにくからむ御免被下度候、これぞ私の今してゐるしごと及女學生のさまなどあらまし御承知被下度候、

今は此地暑假にて(數日前より)日々在宅此間九十九度と申す時一度有之度數から申せばさまではなき筈なれど晝夜の差わづかに三四度位故夜は目かさむれば油あせびつしよりと申す様に夜中温水浴をとる時なども有之候まかし二月極寒の頃の暑中に比すべき安井姉と比せばまだ／＼樂なものとし合ひ居り候へども實際は随分ひどい事に候皆様の海水浴など誠に御うら山しく候、戦争もだん／＼進んで参り我國の全勝利(一二を除きては)と申ても宜しく外國にある身は殊にいはひろく感せられ誠に嬉しき事に候はやく全戦全捷と申す事のみにて結局の勝利の報一日も早かれかしと祈候今は旅順陥落のけふかけふかと待居候のみに候、得利寺の戦など聞くも恐ろしくい

たましき迄に候旅順陥落の報知あれば其日直に日本人の大祝賀會開かんとて先頃より計畫致され居候が一度手ぬかりありし爲めおくれたるがしかしもうさほど遅くはなるまじと皆々鶴首待居候事に候上海にても提灯行列ありとの事に候、戦争後漢口に入り込み來りし商人頓に増加致し候戦後の景況思ひやられ候あ、今少し日本が貧乏ならざりせばと思ふ事度々有之申候もうこれで眞にやめましやうサヨナラ皆サン御キゲンヨウ

どうか時々御手紙を下さる様に願ひます、私もこれからはちと御通信をいたしましやう

清 國 武 昌

七月十四日

戸野美知恵

あつき眞ひる中

同級諸姉

御 中

紹介

大阪屈指の幼稚園に於て同窓諸姉の中保育に熱心にしてなるべく斯道に經驗ある方を首席保母に戴き度き由にて頻りに求め居り可成優遇するとの事なれば(俸給凡そ五拾圓位まで)御望みの方は

東京市神田區駿河臺袋町七番地春田たか君まで御申込ありたし

女子高等師範學校彙報

職員異動

任女子高等師範學校保姆
 當校附屬小學校ノ授業ヲ囑託ス
 任新瀉縣中頸城郡立高田高等女學校教諭兼舍監
 當校音樂ノ授業ヲ囑託ス
 任女子高等師範學校教授
 依願解囑託

田邊春	助教授	山口西三郎
戸倉廣雄	訓導	能勢作
高山ふみ	高	
三上武	三	
囑託	囑託	

女子高等師範學校各學科の科目及び程度

文科
 倫理 人倫道德ノ要領 作法 家政及經濟ノ大要 本邦法制 教授法
 教育學 心理學 論理學 教育史 教育學 教授法 保育法 教育法令及學校管理法 實地練習
 國語 講讀 文法 作文 習字 詠歌 文學史 教授法

漢文 講讀 教授法
 外國語(英語) 讀方 譯解 文法
 本邦史 東洋史 西洋史 教授法
 本邦地誌 外國地誌 地文 地理汎論 製圖法 教授法
 單音唱歌 重音唱歌 樂器練習
 普通體操 遊戲 教授法

理科
 倫理 人倫道德ノ要領 作法 家政及經濟ノ大要 本邦法制 教授法
 教育學 心理學 論理學 教育史 教育學 教授法 保育法 教育法令及學校管理法 實地練習
 外國語(英語) 讀方 譯解 文法
 算術 代數 幾何附用器畫 三角法 教授法
 力音 光 熱 磁氣 電氣 實驗 教授法
 化學通論 無機化學 有機化學 理論化學大意 實驗 教授法
 植物 動物 寫生畫 地質 礦物 生理 衛生 實驗 教授法
 單音唱歌 重音唱歌 樂器練習
 普通體操 遊戲 教授法

技藝科
 倫理 人倫道德ノ要領 作法 家政及經濟ノ大要 本邦法制 教授法
 教育學 心理學 論理學 教育史 教育學 教授法 保育法 教育法令及學校管理法 實地練習

外國語(英語)	讀方 譯解 文法
物理及化學	物理ノ大要 化學ノ大要
家事	衛生 管理 衣食住 割烹 看護 育兒 家計簿記 教授法
裁縫及手藝	裁縫 編物 刺繡 教授法
圖書及圖案	自在畫 用器畫 美學大意 美術略史 圖書教授法
音樂	單音唱歌 重音唱歌 樂器練習
體操	普通體操 遊戲 教授法

●寄宿舎改築

市區改正にて道路を取擴げらるゝにより本校も亦其影響を受けて表門の方は九尺程引き入るゝこととなりたるにつき舊來の平屋建寄宿舎を二階建に改築して屋敷を減じ其餘地を湯殿割烹室等に充てらるゝことゝなり現時其寄宿舎の改築中なり

●本校及附屬高等女學校生徒報國の美舉

本校生徒は七月初旬歸省前課業の餘暇を以て陸軍兵士の背負袋五百箇を縫ひ附屬高等女學校三學年以上の生徒は暑中休暇を利用して七月三十日まで交番に出校し兵士のシャツ、ズボン下各百着を裁縫せり生徒は兵士の勞苦を思ふ心深く炎暑にも拘らず皆報國の微意を盡し得るを喜びて最も熱心に之に従事せりといふ

寄書

割烹教室參觀記

伊藤 せい

サンフランシスコ市にデンマースクールと云へる女子小學校あり此校は唱歌及割烹に重きをおきて教授すと聞き同校に知人あるを幸其紹介にて一日割烹の教室を一覽したれば是に就きて記憶せる事を左に記す

一、教室

教室の略圖を左に掲ぐ

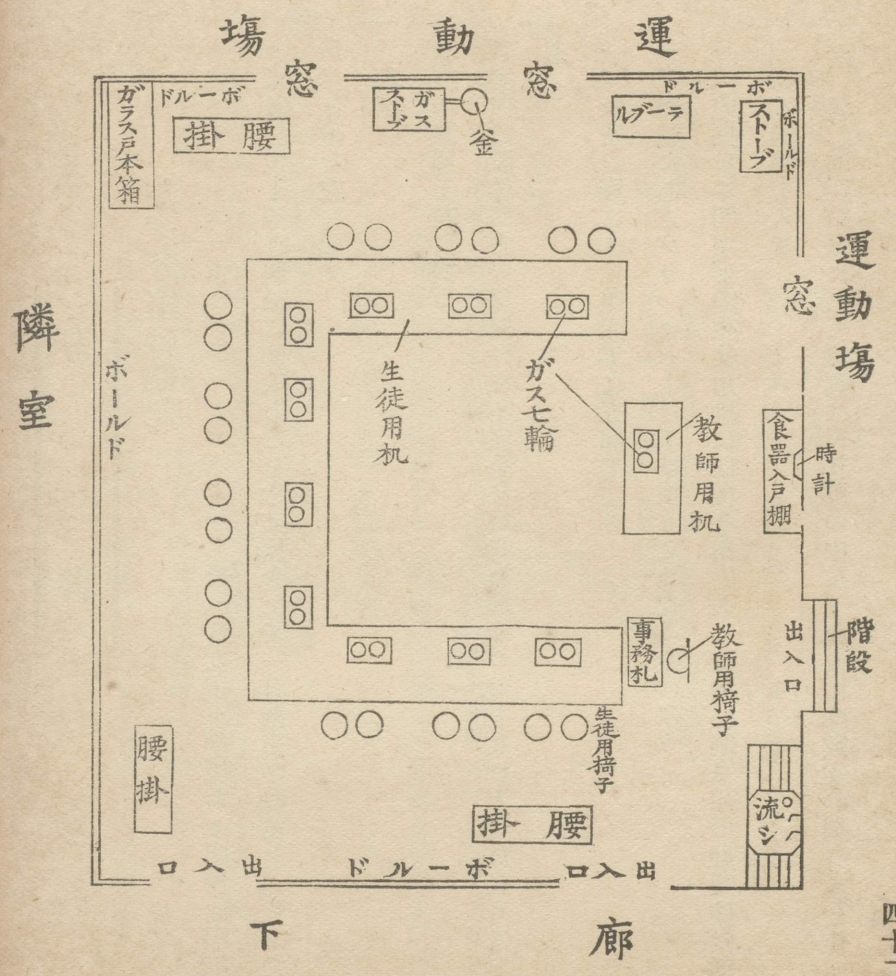
教室内の設備は右の畧圖にて不完全ながらわかるつもりなれどなほ足らざる事一、二、を左に補ふ

一、教室の廣さは凡四間半に五間半なり

一、四壁にあるブラックボードは塗りこめたるものなり

一、中央なる凹字形の生徒用机には引き出しありて内に割烹用の匙茶碗の如き分量を測るに用ふる器物を入る

一、流しは亞鉛張にまて兩翼は厚き板の棚なり此板には數條の細き溝を作りて水の流るゝに便



にす湯及水の栓は壁にとりつけあり
 一、ガスストーブと石炭ストーブとの二種を備ふれどもガスの方が便利なりとて之のみを使用す
 一、釜は直徑一尺一、二寸長サ四尺餘もあらんかと思はるゝ大さにして料理するにストーブを用

ふれば此釜の中にある湯は自然に沸く流しもとの湯も此處より引けり消費されたる水は屋上に備へたる水槽より補充さるゝ装置なり

- 二、教師 主任一人助手二人にて云ふまでもなければ女子なり
- 三、生徒 一回に教授する生徒の数は凡二十人とす
 但一學級の人員は凡四十人故之を二回に分ちて教授す

- 四、教授時數 一週一回、一時間半なり
- 五、教授事項 第七第八の二學年間に授くる事項を三十二課に分ち一課づゝ一枚摺に印刷して一課を授け終る毎に生徒に頒ち足らざるは黑板に記して料理帳に寫さしむ

第一課以下第三十二課に至る各課を通覽するに第一課より第三課までは料理法教授の準備の如く其間に一二簡單なる料理を加ふ之生徒をして興味を覺えしんめとの用意なるべし
 第四課はじやが芋の料理第五課は焼き物第六課は蒸し物第七課はブディング第八課は卵の料理第九及第十の二課は野菜の料理第十一第十二第十三の三課はスープ及之に關する料理第十四第十五第十六第十七第十八の五課は麵麩類に關する料理にて曹達の用酵母及醱酵等の事をも授く第二十第二十一第二十二の三課は肉類二十三第二十四の二課は魚類第二十五第二十六の二課は病身なる人への料理第二十七課は飲料第二十八課はサラダ第二十九課はパイ第三十課はド

ナッツ及揚げ物第三十一課は菓子類第三十二課はブディング類にて第七課に於て授けざりしものを教ふ

今御参考の爲第一課以下第三課に至る各課の教授項目を左に

第一課

- 一、火の焚きつけ方
- 一、分量を測る器の事
- 一、略語 (tablespoonful. の代りに tbs. tablespoonful. の代りに tsp. teaspoonful の代りに tsp. を用ふることを授く)

- 一、分量を測る事 (鹽匙四杯は茶匙一杯に等しく茶匙三杯は大匙ディブルスフル一杯に等しと云へる如きことを授く)

- 一、皿類の洗ひ方

第二課

- 一、朝飯の膳立
- 一、コ、アの作り方
- 一、板類の磨き方

第三課

- 一、黑板に記さる、方法書(分量及料理方の記載法を例をあげて説く)
- 一、蒸焼林檎
- 一、ブリキ類の洗ひ方
- 一、料理人の心得(此心得には面白き所もあれば左に譯載す)
 - 一、料理を始むる前方法書に記されたる凡ての材料を手落なく備へよ
 - 二、是等の材料を前以て取出しおくべし
 - 三、又凡ての必要なる道具をも用意せよ
 - 四、決して當推量をなす勿れ事毎に規則によりてなすべし
 - 五、料理法を學ぶ級に於ては清潔なる手清潔なる白き前かけ等を用意せよ
 - 六、料理中は頭髮に手を觸るゝ勿れ
 - 七、指環腕環等を着くる勿れ是は家にとりのけおくべし

思ふまゝ

春田たか

私先頃知人の米國に留學し「イサカ」市の農科大學に學べる某の許へ何か婦人に就き心付きたる事を知らせよと云ひ送りました。が此程其某よりの便りの端に

前略本市は全然農科大學の爲めに立ち居る町にてほんの片田舎なれば何も面白き事はこれなきも過日或教會の婦人連が催し候「世界一週」と申す事は頗る興味あることゝ感ぜられ候それは町の處々個人の家々に一國々の有様を寫し置き教會を中央停車場として其處より馬車を出して觀覽人を載せ國々の模様を見せしむる趣考にて觀覽料は三十仙にて二晩催され申候其各國の内に日本も加へあり丁度日本は農科大學の教授の家に當り候間小生等も衣類等貸し與へ又公衆に見せる前模様は日本に似て居るか一寸見て吳と申事に付見に參り候處無暗に燈籠等下げあるのみにて他は左程似たる處も無之候得どもそこゝに批評致し置き拵愈開催後小生も二三の友人（日本人）と見物に參り候處米國に行けばワシントン夫妻ルーズヴェルト夫妻等が居り佛國に行けばルイ十四世が居るといふ様な趣考にて殊に可笑かりしは獨逸に參りたる時にて小生等參り候處一人の兵士に扮したる人出て來り小生等を導き候がよく見れば其兵士は大學の教授にて導かるゝ儘に行けば其處には獨逸皇帝と皇后が居られ傍らにビスマルクも居ればモルトケ將軍も居る頓て彼兵士大音上げて皇帝陛下よこは日本よりの使節にて候と紹介す次にビスマルク、モルトケにも同様にせり小生等も眞面目になつて禮など致し候が後を向くや否や吹き出し申候其皇帝になり居候人も大學の教授なりし故一層可笑覺え申候云々

私は此書簡を見ていと面白き催しよと思ひました内に一つの感想が浮びましたそれは外でもありません外國の婦人はとかく眼を廣く大なる處に着け我國の婦人は狭く小さな處に着けます故隨て其經營施設する所にも廣狹大小の差が御座います勿論此弊は婦人のみに限る譯ではありません島國根性と申すか鎖國の餘風と申さんか矢張男子の方にもある様に思はれますが婦人は殊に甚しい様で御座います尤も今日は我國の婦人も種々の刺戟により大分眼を世の中の事に注ぎ家庭の一員たる外に社會の一員たる事をも自覺する様になりましたのは誠に悦ばしき事で殊に此度の時局に對しては其責任を男子のみに歸すべからず全く今度の征露の王師は國民一般の輿望によりて起されたるものなればいはず語らず上下心を一つにして男子の後援をなすは雄々しく頼もしき事ながら扱そが實際を見れば僅かの例外を除くの外は個々に分立して規模小さく又其主意如何に有益なる企てにても其内容の有名無實なるもの多し是其會員の集會を催すことありても兎角遠慮勝にて打解けず丸でお客様にでも來た様に思つて居て會の大事を議するに當りても他人の事の様にて二三の人の意見に委して顧みず遇々意見ありても打出していふを憚り人も不満足に自分も不愉快にて終るを常といたします儲會散して心に留まるは誰さんの着物に彼さんの帯何夫人は出過ぎ者何令嬢はおしやべりよと人の職分を盡せるを譏る位に過ぎません斯る人は大抵衣服髪飾等が苦になりて出席自然に足遠くなり一人減り二人減り遂に會の名あれども實無きに至れる者随分多き様に見聞致しますこれでは迎も社會の一員で候と威張譯には參りませんではありませんか勿論前文の

米國婦人の催しはいはゞ遊び事の様なもので大騒をやつて賞賛する程の價值はありますまいが小
 さくとも其全市を舞臺とし世界の各國と古今の歴史とを捕捉して之を施設し子供にも大人にも婦
 人にも學者にもそれ〳〵思ひ〳〵に興味を感受し得る様な趣考中々面白いではありませんか是畢
 竟平生の着眼點が廣く大きいから従て一寸した遊び事の末にも其氣宇があらはれるのではありま
 すまいかさればこそ今日マツギー夫人の一行やリチャードソン夫人の如き博愛主義の遂行の爲め
 には米西、南亞、の戰爭に従軍し今亦極東に來りて我亦十字の事業を助けらるゝ等其路の遠近や仕
 事の難易や關係の親疏を問はず遙々出張して人道の爲めに働かるゝ様な女丈夫も現はれるので御
 座いませう尤も我國にも安井姉や河野姉河原女史の様に外國の女子教育の經營に盡瘁せらるゝ女
 丈夫もないでは御座いませぬ故決して外國婦人に負けはせぬ様ではありますすが翻て一般婦人を見
 れば前申した様な婦人が多く一般にはまだ中々左様には參りませぬ就ては我國は今や上 大元帥
 陛下の御稜威と下忠勇なる海陸軍人の御蔭により世界の強大國と戰ひ連戰連勝の結果世界の一等
 國と肩を比べる様になりましたから我々婦人たる者もつとめて着眼の點を高く廣く大きく致しま
 して婦人は婦人相應の役目を出來る丈多く立派に引受け社會の一員たる責任を盡したいと思ひま
 す否お互に我々同窓は自分自から其事を心掛くるのみならず我子、人の子を教育するにも男子は
 猶更女子にも此事を注意し遊戯の末にも心して鎖國の餘風否島國根性を早く取り除きたきものと

思ひます如何にもつさらぬ事を寄書欄にとは嗚呼かまじう御座いますすが是れが即社會の一員否本
 會の一員たる義務を盡す手始めで御座いますから皆様も其思ひ召して御免しを願ひますのみなら
 ず次回より皆様からもどし〳〵御寄書を成され會員たるの義務を御盡しならんことを希望いたし
 ます

文苑

紫式部の墓所と其の碑文と

關 根 正 直

本會報編輯の御人よりかねて一文を寄せよとの求めあり承ると諾しおきたるがはや期日も切
 迫せしにより去年戯言まじりに記しおきつる舊稿ながら姑く違約のせめを免れんとてさし出
 だしつ會員諸君願はくは恕せられよ。

紫式部の墳墓は、京の北葛野郡紫野なる雲林院白毫院の南小野篁卿の墓の西にありし由、古き
 源氏の註書河海抄に見えたるが、安永九年の選なる秋里翁の都名所圖會には、何のさたもなけれ
 ば、其の跡も絶えたるにか。然るに其の後寛政七年（今より百年餘り昔）古き跡を尋ね究めし人あ
 りて、京都の儒醫畑鶴山翁に誂へ、碑文選をせしめし事の、閑田文章に載する伴蒿蹊翁の文にて知

られ、又近き頃、古蹟保存會とやらにても、其の跡を探究して標の石を建てられたりと聞き及びて、いかで一度は詣で、見ばやと思ひわたりしに、今年(昨明治三十六年)春奈良京のわたり行く事のありしついでに、一日彼處に尋ね行きぬ。

此の日朝より車に乗りて、まづ下鴨の社に參拜し、上鴨を歴て大徳寺を巡り、山門にのぼりて例の利休居士の木像を見などして、さて志す方に徘徊せしに、不圖道の傍に『此奥に小野篁卿の墓あり』との勝示石を見付けて、喜ばしく思ひ、棗について細路をたどり行きつるに、思ひもよらず紫野織物會社工場の門前に出でたり。是れより外には小逕もなし。當惑せしかど、さて止むべきならねば、門に入りて役員たつ人に、まかしの由を問ひければ、彼れ打傾きて『當社の構内に何やらむ墓石あり。されど此の門よりは至りがたければ、此の外郭の塀につきて、裏手にまはり社宅の門より通らるべし』といへり。まづ嬉しくて表門を出で、車挽く男をそこに待たせおきて、己れ一人塀にそひつきて巡るに、謂はゆる犬走りばかり、人の踏みたる跡ありて、側は深田なるが、兎もすればすべりて陥りぬべきを、辛うして社宅の門にたどり着きつ。門内を窺ふに、棟つきの長屋左右にならびて、社員さては職工たちが住まへると見えたり。端なる家に齒の浮くばかりなる音したるは、釜のそこをかけると覺ゆ。五條の宿りには、から臼の音をこそ、かしましとはかきたれ。それにも増してさもけうとき物の響きかな。げに己かじの營みに隙なきを、驚かさ

んも心苦しけれど、打こわづくりて『内方人に物申す』と音なへば、黄なるすしの袴にあらぬ蝦茶袴の破れたるを繕ひて、物したりと見ゆる前垂に、毛糸の組のたすきかけたる少女出で来て、鍋墨に染まりし手を板敷につき、何事と問ふ。まかしの由いひて案内請へば、『そは此の奥に侍るなり。眞直に行きたまへ』と教ふ。いひなしふるまひの優しき、さすがに都ほとりなればなり。此所は長屋の人の通路にして、外より人の入り來ねばにや、道のたゞ中に大きな盥を出しおきたる、薪の束をくつろげ、俵の炭のちりぼひたるなど、家々まどけなき體にて、むね／＼しからぬ軒のつまごとに、白き夕顔の花は這ひまつろはで、煤けたる衣やら、小兒のむつきの滿艦飾とかゝりたる、凡ていと乱がはしき所を、天に踏み地に踏するの態度を以て、やう／＼にくゞり抜けつゝ行きあたれば、雜木二三株あるもとに、一基の小碑あり。是れ即ち篁卿の墓にして碑側に明治廿四年十一月建遠齋小野長愿と彫りつけ、別に助成者土方久元伯等の名をも刻せり。之れと並びて更に白くなま／＼しき御影石の、表面には紫式部墓、裏面に明治三十二年二月建之とあるが、彼の保存會にて物せしなるべし。兩碑相距る事僅に三四歩、所のままは前記長屋の奥の三四坪ばかりの地にて、彼の小新石の外には、建碑のいはれ舊跡なる由をも記さず、卒塔婆針貫の柵もなければ固より塚らしきものもなし。唯かたはらに藁塚のちりの積もれる、多くて見苦しからずと兼好法師はいはれしかど、其の臭氣をいかゞはせん。其の不潔卑俗なる、市内の廢寺の亂

塔場も、是れ程にはあらずかし。

嗚呼是れや彼の、平安時代の國文學に光輝を騰げて、今に餘影の粲爛たる女神の靈の常しなへに鎮まります所なるかと、且呆れ且慨かるれど、花の一枝阿迦の水一杯をも手ひけんたつきなければ、唯一拜して元入りし門に退出つ。げにや『思ひ出でて偲ぶ人あらむ程こそあれ。そも亦亡せて、聞き傳ふるばかりの末々は、あはれとやは思ふ』と兼好法師のいはれたるも理り、古塚はすかれて、いつしか田ともなりにしよ。さるにても、鶴山翁の物せし碑は今いづこ。寛政といへば、今まで百年といひて多くも過ぎぬに、いづちはふらかしつるぞ。田の畔にふせて、溝の小橋とやしたらましと、又懲りずまに其の邊の田といはず畑といはず、とゆきかく行き、かけたる石にも心をつけて時の移るを覺えずさまよひしは、野狐につかれし痴者と人や見つらむ。折から待たせ置きつる車挽く男は、斧の柄の朽ちぬるばかり待ちわびけむ。我が行くへを尋ね追ひ来て、怒れる聲に促すを、理りと思ふものから、歸らんと道に惑ひ、前なる田井の流れを越えかねて、たゆたふをもどかしがり、我れを脊におひて涉りつ、『はや車に乗れ。日もくれぬ。』といそがす詞の渡し守のやうなれば、

脊にしおはいいさ言問はばん都人わが思ふ石はありやなしやと』と戯れまほしかりしかど、彼れが氣色に恐れてうちも出でず。やがていふまゝに車にのりて、二條のかりの宿りにつきしは、

黄昏近き頃なりき。

由來京都は文學の士女に富めり。風流好事の人はた固より多かるに、いかにぞ彼の墓域のさまを知られざる。或は彼處を眞の舊趾にあらずとして放棄し置かるゝか。若し然らば不親切の限といふべし。速に古今地勢の變遷を釋ねて、大かたにてだに、其處をはかとか指定してよ。序に鶴山の碑のゆくへも、知る人あらば教へ給へ。扱其の文は左に掲げて、まだ見ぬ人の參考に供へん。

紫式部碑

紫姬者、越前守藤爲時女也、生而穎悟、文德夙著、姬兄惟規嘗讀書、姬在傍暗誦不_レ失_二一字_一父撫_二其背_一云、恨不_レ令_二汝爲_レ男也、爲時雅通_二經史_一、廼以_二其學_一悉授_レ姬、迄_二年稍長_一給_二事御堂公家_一、尋侍_二上東門院_一、既而適_二左金吾宣孝_一生_二二女_一、亡_レ幾宣孝歿矣、姬持操甚堅、獨與_二其女_一居、覃_レ思讀_レ書、通_二五經_一三史_一涉_二佛老百家_一、詞藻富贍、逸思如湧、永延之朝有_二十才女_一、紫姬爲_二之冠_一、內命著_二編新語_一、姬乃著_二源語六十帖_一進呈焉、外託_二艷詞_一內存_二諷諭_一、意匠結構擒藻婉麗、前無_二古人_一、實女子之大手筆也、時之哲匠不能_レ贊_二一辭_一也、姬有_二容色_一、貴介公子以_二歌通_一殷勤、姬拒_レ之亦以_二和歌_一、其詞婉曲而貞烈、不可_レ奪也、其他事實、詳_二于源語諸註及日記等_一、卒葬_二城北雲林院_一、家今在_二院東南數百步_一、但墳塋存已、今茲寛政乙卯、有_二尼師_一、傷_二其冢日就_一荒廢、募_二緣四方同志_一建_二之碑_一、令_二維龍銘_レ焉、銘曰、

倚與斯人 窈窕淑貞 閔德斯美 若瑤若瓊 雲鬢霧鬢 斂采榛荆 彤管之煒 日星晚明 爰

建爰勒 永存令名

寛政七年歳次旃蒙單闕小春日

鶴山畑維龍子螻甫識

皇軍の牛莊を占領したりといふことをきいて

故瀬川友子の君をおもふ 下 田 鶴 子

御軍を導きにけむと、まれるきみかみたまも天かけりつ、

なつかしき君かゑかほもまのあたりみえて嬉しきけふにもあるかな

根なし草(つばき) あ ふ ち

雑報のわたりに、たゞよふべかりしこの草の、いかにしけん前號には文苑などいふ、おもた
たしき處に、ひきあげられて、いとかがやかしう、かれしほむべう覺えつれど、さて根なし
草の根をたえてといはれんも、さすがなれば、種のあるほどは、なほおふしたて、見んとて、
手帳のかたはしよりうつしおくりつ。

糸のやうなるもの

春の末つかた、古き御寺のあたりを過ぐるほど、櫻の花のほろ／＼とちりかへるに、姿をかしき

空也僧の年老いたるが、鐘たゝきて行くを、四つ五つばかりにや、いとらうたき里の女の子の、
穴あきたる錢ひとひら手にさゝげもちて、おのが家より走りいでつゝ、やよと呼びかけたり、い
とうつくしう、所のさまよりはじめて、晝にかゝましかばと思ひぬ、

旅順第一次攻撃の捷報達して、號外の聲かまびすしく、家々は日章旗かゝげて祝意を表し、いち
はやく荒物屋には旗竿國旗をひさげるなど、街のさまきのふにかはりてどよめきわたりしが、日
くるゝほど買物にとてたちいでしに、雜誌うる店をはじめ、店頭に號外をはりたる所は人の山を
きづきたり、その中に職人めきたるものゝ國旗をふところにいれ、旗竿を肩にかつぎて見入れる
がありかへりて家にかゝげんとにや、これも晝にかきたるやうにて、日露戦争の繪巻物のはじめ
を見る心ちしけり。

解しがたかりし詞

仲尼閑居す曾子侍坐すと、口拍子に習ふことの、またなくむつかしかりしはいはでもあれ、高等
女學校にて學びし徒然草などの、おもしろからずむつかしかりし事よ、師の君のみしきりにおも
しろしとほめたゝへらるれど、いづこがしかりとも覺えず、『世にしたかはん人は機嫌をしるべし』
などいふことも、いろ／＼の例をあげて教へられたるやうなりしかど、それだに、げにもとうな
づかるゝまでには至らざりき、それより進みて學びつるをりも、『形有様よりはじめてたゞひなき

人柄なれば御息所もはぢ思はるべきは是なりとえらび出されたるなり』などありし、其のはぢ思はるべき人とはいかなる人なるべきか、えこそわきまへ知らざりつれ、さて己を本として推しはかるも如何なれど、これ等によりても、國語教授にて文章の意を皮層にとゞめず、會得せしむることはいとかたかるべし、されば今用ふる讀本にても、其の編輯法の前後の事實の關係にのみ重きをおきたるものは、實際の教授にあたりて、困難を覺ゆること、編輯者の意外にいづること多かるべく、又教へらるゝものは教ふる者の思はぬ困難を覺ゆることもあるべくや。

桂のかをり

聖堂の森の木立の面白く黒み渡る頃、ものより歸るに、やう／＼近づけば、そこはかとなく桂のかをりいとなつかし、これは鹽谷岩陰のものせる茗羹甘勝小記にも見えて、昔よりあまたありつるよしなれば、いくそばくの學士か、此の枝を折りかざして世にはいでけん、はた今もあまたの人々の此の木蔭に物學びせば、其のかざ／＼ん料にとて、其の枝も年々にしみ榮ゆめり、いつの年なりけん、此の花の盛なりける頃、こゝにありし人のもとにつかはしける。

手折るべき桂も今やかをるらん君か文よむ夕暮のまど、

市區改正にて、此の森のせばめらるべしとか、いとわたらしう、せめて此の梢のみは、斧にもれで、ときはかきはにとなん。

高直なるもの

ひかし高直にて、今下直なるものも、まれにはあるべけれど、大かたは今の方高直なり、一兩にて縮緬の帯も何も買はれつなど、昔人はいふなり、さておのれの物の心しりそめてよりも、年々に諸色高直との噂をさかぬ年なれば、何も／＼いよ、高うなりゆくめり、中にもわきて此の頃高くなれりと思ふはお辭儀なり、低きおとぎは因循なり、何となく當世めかずして氣がきかず、と人々の思へるにや、とし／＼に高くなりゆき、ともすれば後悔先にたゞで、口をしき事もありかし、さては握手にてもし、詞にてもかはすかと思ふに、さにもあらず、これはいとをかしき事なり、七重の腰を入重にはをらでも、人々相互の間には、其のほど／＼に禮儀あるが、なべてめやすかるべきものを。

ほと／＼ぎす

をさなかりし頃、山のふもと湖ちかきところにすみて、春は寛のほとり、藪椿のちれるあたりにならずみて、朝な／＼鶯の口まねしけるが、其の鳥の聲のいとうるはしかりしことは、今もよく覚えて其のあたりのさまも見ゆるやうなり、されど夏のはじめのほと／＼ぎすは、今つとめて思ひいで、いさ／＼かも記憶に残らず、これも常に口まねしつ、と人々のいへば、同じやうに聞きならしけんを、都に移り住みてより、ふつに聞かねば、そのまゝに忘れはてけるなるべし、今もさかまほしと思へど、山里に尋ねんみやび心もなく、都の空をもまれ／＼に過ぐれど、寢覺しらぬ

身には、遂にいかなる聲とも知らずでせざるなり、されば歌になどよみて聞き知りたるやうにも
てなせど、そは皆空になのるそらごととなりけり、かゝる人なほ世にもあるべくや。

乗合

夕ぐれ近き頃、丸の内あたりより電車にうちのれば、官衛會社等につとむる人々のかへさにや、
あまた乗りあへるが、おのがじ、其のほどにつけつ、みな心ばせあるやうにもてなせるさまこ
そをかしけれ、或は高き「カラ」におとがひをうづめ、或は金の眼鏡の底にいとまなことを光らせ、
或は八の字鬚に鼻の下の長さ短きをおぼめかし、或は花やかなる「チクタイ」に胸のあたり、さう
くしからずとりつくるひ、或は細き「ステッキ」を手つきをかしうまさぐりなど、見渡せばさま
ざまなりかし、さても世の男の上の品なるは、かゝる乗合の心易き所にはあらざるべければ、こ
れはけしうはあらぬ中の品にやあらん、袴の色にはちなまぬ、昔のゆかしき人をこゝにあらせて、
かの女の品定しけんやうに、あげつらはさせましかば、いかにをかしからまし、と或人のいへば、
さるはしたなきわざをいかで、といふもあり、これもいとをかし。

三百さん

海のはとりに暑さ避けんとて、舟に乗るに、ともに行く人は舟系ひすとて、底のかたに打ふして
あり、されどおのれはそこにはえ堪へねば、ひとり甲板にのほりつ、こゝにははやう人々ひし〜
とつどひぬて、疊しける所は更なり、いとかりそめにまうけたるむしろの上にさへ、あふる、ば
かりなれば、かたへについぬたるに、舟人のこなたにおはしませとて、蓆敷さへたり、いとう
れしくて、とみかう見つ、海のけしきをひとりめではやすほどに、かたへにいと世なれて見ゆ
る鬚の人來れり、さして行く濱邊の人にやあらん、乗りあへる田舎の女どもをさへ見知れるやう
にて、心やすげに言かはしぬたりしが、ふとおのれにむかひて、いづこの方にて、いづこにも
したまふにかなど、さま〜のこと尋ぬるに、煩はしくていかに其の口ふたげばやと、つぎ〜
に見ゆる所々の島山の名、はた行くかたの名所どもなど尋ぬるに、たど〜しからずいらへつれ
ば、なか〜に便よし、さて其の人またいふやう、おのれは彼處の何町といふ所に、せんとうを
營むものなり、滞在し給はんほどには立寄らせ給へやなどいふ、せんとうとは何にかあらん、そ
の容態混堂のあるじとも見えずなど思ふほどに、舟のはてければ、やがてたち分れき、さて其の
後日數へて、或混堂のほとりを過ぎしに、彼のいかめしき鬚窓の中に見ゆ、さてはなは錢湯なり
しなりけりといとをかしくて、彼はいかなる人にかと所の人に尋ねれば、三百さんなりと答へつ、
符徴詞に三百はやみとしもいへば、あやなかりしもことわりにこそ。

日記の一ふし(房州めぐり)

松の軒端子

七月廿五日 朝五時靈岸島にと出でたつ竹澤、保井、木宮、竹山等の人々と、もに房州に遊ばん

とするなり六時舟に乗る此の日雨ひねもすやまず同乗者三四組あり乙女ふたりおうな二人をのこふたり子供みたりそれを己れらを加へて十五人此の船の上等室を占てほとく餘地なし折からいづこの人か夫婦とみゆる外國人うちつれ來てこの室に入らんことを求む靴を脱きてよといふに困じやしけん廊に腰掛とりよせてゐたり雨といふりしきりて室の中にさへ吹き込むにまして外にてはと思へと濡れたる外套汚れたる靴にてはいか、はせん十二時ばかりにからうして保田町につきぬ石井某といへるはけふうちつれたる人々のをしへ子なりそが家のこの港にあればうからの人と、もに出で迎へて晝げす、めなどす家廣くて海に臨み山さへそのうしろに聳えれば冷しきこといはんかたなし雨いと、ふりまざるにかならず一夜をこゝにあかし給へとて切にと、めなどいとねもころなればさはとてこよひをこゝに過さんとす彼の人喜びてさまくゝにもてはやすあるしぶりいと濃やかなり

二十六日 雨晴れたれば鋸山にとゆく道のほど一里ばかりとかや山路に入るまゝに石を切り出たしたるあとさだかにみえ石の階自然のまゝに刻みなしたるなどいとめづらし

引き下す石のかずくゝ年をへて鋸山の名をや負ひけん

日本寺のあたりより海を望みたるさまいひしらずおもしろし浮島もみゆ

おほつかなたかよひそめし名なるらんよせてはかへる波の浮島

五百羅漢の像をすゑたるあたり百合の花さかりなり

あを色の錦のあやに似たるかなくさばにまじる山ゆりのはな

保井の君はかねて植物動物のたくひをとり集めんとて薬よ箱よと用意せられたるがけふしもこの山のめてたき花のくさく、珍らしき蟲のたくひとも彼の箱をみてけんといとくゝをかしうなかへりつきたるはひるげのほとにやありけん物したゝめて後こよひの宿り所なる市部の驛にといでたつ

二十七日 富山といへるはこゝより一里ばかりとかやかねてはけふその山に登らんと思ひおきたれど己れよべよりこゝろあしく胸痛みて堪へかたければ思ひ止りつ他の人々のみぞのぼられたる此の日は醫師よ何よともてさわぎていと苦しくて暮れぬ相ともなひたる人々のみとりいとねもころなり竹澤の君は山にもゆかでさまくゝあつかはれたるうれしくもかたじけなし旅は道つれといへるさとびことぞいまささらに身にしむこゝちなんしける

二十八日 けさは心地すかくゝしくなりにたればうちたゝばやと思ふに何くれの用意どもしてひる過ぐるほどに車にてゆく北條までの道のほと三里ばかりと聞けど山坂多ければ道はかどらず暮るゝほとにぞ木村屋といふにつきぬる

二十九日 人々うちつれて濱邊にとゆく館山の公園とかや小高き處にのほるに鏡の浦の全景一望

のうちにあり沖の島鷹の島などのいと近くみゆるは池の中島にも似たるかなかたへに物うる屋あれば入りて憩ふほどに空俄にかき曇りて雨いたう降りいでぬ風さへくはゝりたればせばき屋のうちかくるべきかたもなしからうじてをやみにたれば家路に向ひぬ

高木浪子といへるは我がどちの友なりこのあたりの人にて今は筑紫の福岡なる女學校にありて教の業にいそしまるゝが夏の休に歸省して此の頃はそが家にありこよひしも音つれらる久しきほと
の對面いとうれしかたみの物語つくべうもなきに夜はやうゝ更けぬあすは島あそびの案内せん
といはるゝにいとうれしくそのほとを契りて袂をわかちぬ

三十日 きのふ契りおきつれば朝とく起きいでたるに雨いたく降りてとにいづべうもなし人々いたく失望していかにせましなといひあへるほどにさしもすさまじかりし雨いつしかをやみになりて日の光さへもれいでたりみな手をうちて喜ぶこと限りなし契りたる人やまつらんとてゆく程なく船のよういどもしてこぎいづるに海は浦の名にそむかず誠に鏡のやうなり沖の島にと心ざすこゝより舟路二里ばかりとかや岸をはなるゝまゝに左に洲のさきを望み右には那古舟形をはじめ村々町々の家ゐとも遙にみゆことに名高き観音菩薩の御堂にやあるらん瓦の白堊いとしるし程なく島につきぬ島のめぐりは數多の巖もてたゞまれ中央には松の大木幾本となく生ひたるに下草所せく茂りて踏みわくべきかたもなしそが中に濱おもとゝかや常は見なれぬ花今をさかりなり

蝶もこぬはなれ小しまの濱おもと誰にみよとか花のさくらん

うちつれたる人々のうちには人手よ磯巾着よとあさりありくもあり岩のはざまにうちよせたる貝ともものうつくしさをひろふもあり己れは小さき石の形めでたきを拾ひて後の思ひ出にせんとすかくて大なる巖に腰うちかけて沖の方を見るにこのめぐらしくのどかなる一日をいたづらにはせじとにや數多の漁船幾むれとなくこゝかしてにもつなもやひてすなどりしつゝ網ひきあげんとこのしりさわぐさまいとめぐらかなり又海女の小さき桶を腰に結ひて此の島のめぐりを泳きつゝ貝ともあさるさま見なれぬ目にはいと興ありてみゆ程なく獲物數多もて來てめさずやなどいふ繪にかきたる鹽くみなどいふはかたち清げになまめかしくみやひかなるさましたれどまのあたりみるに黒みたる色肥えたる肉をのこといつこかはことなるされど腰のあたりに衣ひきまとひたるのみぞさすがは女なりけりと覺えていとをかしまた近き岩に鷗の五つ六つ下りぬて思ふことなけなる
さまいとうらやまし

岩かねを洗ふ波にもおとろかずうたふかもめの聲ぞのとけき

まひるばかりに高木の君のはらからうから舟こきつれて破子もて來てすゝめらるさてをのこどもは衣ぬきすて女どもはもすそかゝけて海に入り大なる岩かき起すほどになまこゝうに、ひとで、たこ、くらげなど數多出づるに人々興に入ること限りなしこれらはみな例の採集の君の箱のもの

ならんかしこよひは高木の君の家に宿る

三十一日 さわることありてけふも猶こゝにとゝまることはいと冷しき山本なれどけふは日てりてさすがに暑さ堪へがたし主の君をはじめこゝの人々皆よき人にて何くれといとねもころにもてなざるれば心安くていとうれし

八月一日 けふは空のけしきいとうるはしう晴れわたりたればこゝの人々にいとま申しいでたつ先づ白濱の燈臺見んとてゆく道は險しとはあらねど山坂多き所なり九時半頃にや白濱につきぬ守る人とみにはみせかたし十一時半頃にきませといふにせんかたなければ暫時まつほどの近きわたりを見ありくこゝはひたふるの芝生にて松の木數多生ひ巖こゝしくたゞまれたり昔源頼朝のこの巖のあたりにまばしかくれたりといひ傳ふるはまことにや時來ぬとて燈臺に案内せらる同じ心に待ちゐたる書生とも七たり八たりともろともにのぼる階の數はいくばくかありけんいと高しいくばくの船のゆくへか照らすらん野島が崎にたてるともし火

もる人の夢やいくたびくだくらんよせてはかへす波のひゞきに

大島いと近うみえてその外の伊豆の島々三つ四つみえたるいとうれし燈臺の前にさゝやかなる御社あり野島神社とかや旅路安らかに守らせ給へとふしをがみて
うちよする波のまらゆふ手向なん野島かさきの神の御まへに

午の刻ばかりにこゝを出で、千藏といふ所に向ふうちよする波のけしきすなどりする船のゆきかひいとおもしろし千藏につきたるは二時過くる頃にやありけんこゝにて晝餉をたゞめつこよひは賀茂川の驛に宿らんとすやうく近うなるまゝに遠くみえたる山の姿は海にせまりて道をさへぎり磯邊によする白波はその響をまして舟歌うたふ聲もとたえたりこれ山脈の餘勢海底に起伏するによれるなるべしさればこのわたりは小さき岬灣出入して白波こゝに激するさまいとをかしく見處多しとかくするほどにをちかたははや夕暮の色に包まれてさだかならず只白波のみところくゝに色をみせたるいとく淋しくも物凄しいよく山路にかゝりぬる頃は日全く暮れはてたるに車ひくをのこのいふやう今朝より遠き道を引き來つればいたう疲れて此の阪登るべうも覺えず願はくは少し歩ませ給へといふことわりなればさはとて打ちつれてゆくに左は賀茂川鑛山とかや近き頃銅鑛を見出したしたるなりといふ左は嶺岡山とかや此の奥は廣き牧場にて東と西とにわかれ牛をも馬をもはなち飼ふ所なりとぞ日は全く暮れて道いとくらきにまらぬ山路をたどりゆく心地わびしきこと限りなしからうじてのぼりはてたれば今は車にめせといふにみなうちのりぬ今しもひき出でんとするに竹山の君の乗り給へる車の長柄はさと折れたり若しいそぐほどならましかばいかに危うかりなましをとぞ人々よろこびあへる九時過ぐる頃にぞ賀茂川の町なる相摸屋といへる旅亭につきぬる夕餉をたゞめ湯あみなどして前なる濱邊に出づるに漫々たる太平洋の浪おのづから

響ことにして大わだの面影知らぬ人には覺えずあな勇ましとぞよばしめたるまことやこよひは居待の月なりけりかなたの空に雲おしかゝりたればいとおぼつかなかりしをさわらで出でたる月のけしきはあはれさもをかしさも限りまらずこそ

はてもなき大らなばらにすみわたる月のとまりやいづこなるらん

二日 竹澤里子の君は此の國の人にて大山の里古畑とかやはそが家ゐのある所なり過ぎし日別れにのぞみて必ず音づれ給へさらずはうらみ聞えんなどの給ひにたれば今日しも驚かし參らせんとす道のほど右には上總をかぎれる山々連りて青垣をつくり左には嶺岡の山うちつゝきて大空に聳えそがあはひは廣ううち開けて或は田或は畑みどり深う朝風になびけるさま豊年のまゝしまづみえて心地よきこといはんかたなし賀茂川といへる驛の名はもと川の名よりやいでけん同じ名の川道に添ひて流るさばかり廣しとはあらねど何とはなしにおもひきありと覺ゆ

たちよりていざ汲みてまし東路に名もむつまじき賀茂の川水

古畑につきたるは朝九時半の頃にやありけんあるこの君なのめならず喜びて出で迎へらるこの家は大山といへる山の半腹にあり家ゐも廣う便よりよく作りなされたり隣といふも一町ばかりやへたゝるらん屋のうしろの方には大なる木とも茂りあひ東の方にはたかむら所せく立ちなみたりさて山の上の御堂に詣でんとていでたつ三人はみな疲れにたりとてゆかずともゝ此の大山といへ

る今は里の名となりたれどそのはじめは此の山の名にて相模の國なる大山をうつしまつれる所なりとぞしかして徳川幕府の頃にはこの山の神主は數多の祿を給せられ位も高かりしかば里人の尊信大かたならざりしを今の御代になりては祿も位も失ひて家産いたく衰へにたれと猶さる舊家なれば人々の敬ひ尊ふこと大かたならずとぞ御堂はさのみ大なりといふにはあらねどさすがに昔忍ばれて何とはなけれとかうゝしくみゆ本尊拜み奉りてのちこゝかしこめくりみるに石の階いと高う築きなして仁王門もあり下りゆくまゝに三十幾番とかやの觀世音を安置したる御堂ありあたりいと靜にて人の氣はひもなしかへりて後みぬ人々に山のさまなと物語る門のかたへにまつらひたる物見やうの所ありこゝよりみやればいくへの山のあはひより賀茂川わたりの海はつかにみゆこれにぞ此の地の高さもおもひまらるゝ碁目並べよ何よとあそぶほど山より吹きくる風のそよそよとかるく袂を動かしたる冷しさいはんかたなし

山高みふきくる風のすゝしさに古畑のさとはなつなかりけり

日くらしの聲より外に音もなし古はたの山の奥のひとつ屋

三日 朝とくこゝをたちて清澄山にのほらんとすたゞ一よざの系にしなれど名殘をしきこゝちす

こはたてふ名もたのもしき里なればまたもとまじけふ別るとも

さはいへどこのあるこの君ももろともにてたゝるればいとうれしく車ひきつらねてゆくほどに

空いたうかき曇りて雨俄にふりいでたりされどほとなくやみぬればかばかりぞとおもふほどにまた同じさまに降りきぬわびしきこと限りなしとて道のほとりの茶店にいこふかくては山のぼりおぼつかないかにせましなど人々歎くほどにからうじてやみぬればたちいつるにまたも降りいでなどして天津といふ處につきぬるは十時ばかりにやありけんとかくして晝飯したゝめなとしつそらもいとよく晴れ渡りて雨のうれへあらじとみゆるにぬるともよしやといひ定めて清澄山にといでたつ麓までは車にていそぐ山路にかゝりぬれど道いと平なれば雨のなごりの水たまり多くてなか／＼にはかたらず猶のぼりゆくほとに男女うちむれていく組ともなく下り來るは此の山の御神にもうでしなるべしなほゆくまゝに人の家一つふたつみえそめたるが巔近うなりて一村をなせりさて御堂にもうでゝあたりを見るに大なる杉の木二もとたてりめぐり幾ばくなるらん僧のいふこは我國にて並ひなき杉なりとげに珍らしき大木なりかへさは農科大學林業部の試植場にたちよりに觀覽を請ひたるに心よく許されてこの山にあるくざ／＼の動植物の標本とも見せてねもころに説明せられたるいとうれしさていとま申してたちいづるに空暗うかき曇りたれば雨やふるらんといそぐにほどなく麓につきぬ思ひしものくるくまたもふりいでたりいとわびしけれどいかげせん車を急かせて小湊につきたるは四時ばかりにやありけん青海屋といへるに宿るこの屋は名にふさはしく海に臨みたる所にてけしきいとよしされどけふは風荒く波高ければ障子しめ切りて

しめやかなる物語ともすやう／＼更けゆくに波の響風の音いと物すこければとみには眠るべくもあらず夜なかばかりにからうじて夢に入りぬ

四日 かねては鯛の浦に遊ばんなど思ひかまへたりしかどけふも雨降り風強ければ舟出すべくもあらず竹澤の君けふは彼の古畑の家に歸らんと給ふとめかねて端近う見送り參らせ近きあふせを契りて袂をわかちぬ折から雨少しやみたればせめては誕生寺に詣てんとていでたつさすがに名高き所なれば御寺のさまいとおごそかにめでたし先づ拜み奉りてこゝかしこ見めぐる程雨はいと降りまさりて立ちいづべうもなければいつまであるべきにもあらねばからうじてかへりつきぬけふも日ねもすふりくらすにあすは雨晴れずとも都に歸らんとて車のことはかりなどし夜ふけてふしどに入りぬ

五日 けふは思ひしにも似ず空いと河う晴れわたりて海のおもて静なればうれしともうれし朝六時のほとにたちいでぬ車四つに引く人六たりしてきのふ詣てし誕生寺の前を過ぎてゆくにやうやう山路に入りぬ道は險しとはあらねど昨日をとゝひふりつゞきし雨のなごりにや道あしくてはかどらずゆき／＼と興津といふ所にいこふこゝは海のほとりなり右の方には岬遠くいでゝその末におもしろき岩山あり松の木一もその上に生ひたり左には鵜原の岬長くさし出でたる只これのみにてもおもしろきに海の中にはいはほ高くそばたちてひとしほの景色を添へたり大波のよせく

ることにこの岩のいたゞきより波うちかつくさまいひしらすおもしろしましたかの松の木たてる岬の岩も同じさまにてその名残の瀧かとはかりおつるさまなどこゝらわたりすべて安房の海岸にまさりてをかしきけしきなり

大波のよする磯べはあしびきの山ならねども瀧ぞかゝれる

九時過くる頃勝浦につきぬこゝにて車のりかへなどしてふたゝびいづるにこのあたりすべて道普請とかにて土を掘りかへしたるにこの頃の雨にてさながらすきかへしたる田の面を往くか如く車は右左にかたぶき或は高く或は低くゆらめきわたるにのりたる我さへ苦しく堪へかたきにまして引く人はいかならんと思ふにいと、堪へがたしかゝる道のほと二里あまりもつゝきぬらんからうじてよのつねの道になりぬるいとうれし午後二時ばかりに大原につきぬこゝより瀛車に乗りて空飛ぶ鳥のそれよりもはやく兩國橋の停車場につきぬるは火ともす頃なりけんあひともなひたる人々に別れて家路につきぬ指かゝなふればはつか十二日の旅なれどあたりものめづらしきこゝちするこそいとくをかしうもあやしくなん



雑報

●教育に關する 御沙汰

天皇陛下には去る七月十一日東京帝國大學卒業證書授與式に臨御の際久保田文部大臣を御前に召され左の如き御沙汰ありたりと

御沙汰

軍國多事ノ際ト雖教育ノ事ハ忽ニスベカラズ其局ニ當ル者克ク勵精セヨ

大御心を教育に注かせ給ふの優渥なる此の如し職に教育にある者誰か感奮興起聖慮を安んじ奉らんことを勉めずして可なるべき

●皇后陛下及皇太子妃殿下 には先頃

御手製の繡帯を陸海軍負傷兵の爲めに御下賜相成りしが此程も亦同様の御下賜相成りたり三伏の夏の日を御避暑にも成らせられず大御心を出

征將士の上に注かせ給ふ有難さよ

●高輪御殿の兩宮殿下 には深く時局に

御心を留めさせ給ふことは屢新聞紙上に漏れ承る所なるが中にも彼の陸海戦死將士を祭らせ給ふ忠魂堂には木札に一々其姓名官名及戦死の月日地名等も御記るし遊ばされ忠魂堂の三方へ掲げさせ給ひしが追々戦死者の數増すに従がひ最早木札を掲ぐる餘地なきに至りし故此程木札に代ふるに帖を以てせられこれらも兩宮殿下の御意匠に成れる高尚優美なるを榛原に調製せしめられこれを忠魂帖と名つけさせられ其後の戦死者は皆此帖に御手記遊ばされ御手づから供物を調進なるこそ誠に死者無上の光榮と申すべけれ又兩殿下には御避暑を廢せさせられ御學問常の如く遊ばさるゝ御餘暇には繡帯を巻かせられ此程陸海軍負傷將士へ一千卷御下賜相成りたり又過くる頃 御母陛下より下賜あらせられし御

菓子を山縣元帥に御分ち遊ばされ同元帥が老齡軍務に執掌するを稿はせ給ひしか此程又御父陛下より賜はりしアイスクリーム數瓶を亦も同元帥に御分ち遊ばされしかば同元帥は再度の恩賜に感涙にひせび之を參謀本部の上長官に頒たれたりと

●麻布御殿の兩宮殿下 には未だ御幼少に渡らせらるゝことなれば綳帶を巻かせ給ふ等の御事は御母陛下よりは御沙汰もなかりけれども幼けなき御心にも矢張軍國の事を深く思召させ給ひ切に綳帶を巻かせよと御望み遊ばして已ませ給はざれば御養育主任にもさらば兎も角も御遊びの御積りにてせさせ奉らんと申上げければ兩殿下の御悦び斜ならず早速御消毒服其他の御用意せさせ給ひ小さき御手を御消毒の上綳帶を巻かせ給ふ御有様を拜すればそゝる涕もさしくまるゝ様なりとぞ始めは御側の人々も未だ幼

くおはします御事なれば迎も十分の御成績はとひそかに思ひ居られしに其御出來あがりの見事なる中々大人もはづかしき様なればさらばとて十分の御材料を差上げられしかば兩殿下には一としほの御悦びにて此程御避暑の御爲め箱根御滯在中御熱心に遊ばされ最早千巻斗り御出來あがり相成り居るとか

御性質圓滿にまします中にも御謙徳殊にいみじくましまして何事も御ひかへ目に遊ばされ御教育掛等より申上げらるゝことは勿體なきまでに能く御守り遊ばし御學問諸科ともいづれ御好き嫌ひと申す事なく皆一様に御勵精遊ばされ御進歩も著しき由殊にも有難くかしこきは御仁心のいとゞ深き御事にて臣下を痛はらせ給ふ御心如何なる咄嗟の場合にもあらはれさせ給ふ御事は全く御天性にてましますものか何事を御取りさめ遊ばすにも先づ御自らの御都合よりお側の

人の都合よき様困らぬ様と思召し遣らるゝ御慈心の程には人々感涙にむせぶ事も度々なりとか實にや梅檀のたとへもかしこけれど二葉の御内よりかゝる芳はしき御かをりを洩れ承る事のうれしくもかたじけなきかな

●各宮妃殿下 方には軍國多事の折柄なるを以ていづれも避暑を廢せさせられ綳帶を巻きて負傷將士に分たれ又親しく傷病者看護の勞を執らせられ又は遺族の救護等にそれゝ御盡力あらせらるゝといふ

●愛國婦人會

總裁宮殿下を始め幹事の方々の熱心により既に會員數廿萬人に達せしも猶續々入會の申込あり軍人遺族の救護に盡瘁せらるゝを嘉せられ先頃皇后陛下 同會員の名簿を召させられ御覽の上畏き仰を賜ひたるが此の程韓國皇室に於かせられても皇帝陛下皇太子殿下同妃殿下英親王皇貴

妃等より我救護事業中へ壹萬四千圓御寄附なりたるが内五千圓は其御指定により同會に分附せられたりしと其他にも諸外國人の寄附金多きを以て今回英佛兩文の趣旨書を廣く諸外國に配布する事に定められたりといふ

●海軍下士卒家族共勵會

横須賀なる同會は横須賀鎮守府長官の夫人を會長として各幕僚の夫人を幹事とし海軍下士卒の家族を會員として組織し現在會員二百卅餘名にして三個の工場と一個の診察所とを設け會員は日々工場に通勤して海兵の被服、信號旗及兵器を藏ひる袋類の裁縫をなして賃金を得るの方法にして其成績甚宜しく一ヶ月に一人の得る賃金大抵十圓内外にして中には廿圓以上廿三圓を得る者數人あり又會員中病者あれば診察所に赴き原價に均しき藥價を以て治療を受くるを得る等軍人家族救護會としては適當なる者にして直接

なる利益の外に間接の利益も亦尠からずといふ

●女子の新職業

(イ) 鐵道作業局の女子雇員採用

鐵道作業局にては今回女子雇員採用の内規を定め新橋及京神阪の諸驛に於ては既に採用せられ居りしが猶新橋に於ては増員することゝなり目下募集中なりといふ扱其内規は左の如し

一 女子雇は運輸部に於て施行する運輸従事雇員採用試験に合格せし者より採用す

一 女子雇は配遇者なき者に限る

一 左の資格を有する者は特に試験を須めず審査を経て採用することを待

官公立高等女學校師範學校三學年以上の修業證書を有する者及之と同等以上と認むる私立學校の卒業證書を有する者又は公立學校の教員たるべき免許狀を有する者

一 調査係の事務に従事する者に限り學術試験は尋常小學校卒業の程度に依る

(ロ) 街鐵の女子採用

東京市街鐵道會社にても女子を事務員に採用せんとし此程試験を行ひたるに二十五名に對する二百五十名の志願者あり其内百八十名は試験合格者なりといふ之によりて見るも目下女子が如何に職業を求めつゝあるか又此種の職業を採り得る女子が比較的の多きを見るべし

(ハ) 東京電鐵の女子職員募集

東京電氣鐵道會社に於ても乗者切符及賃錢計算方として十六歳以上にして高等小學校卒業程度の女子を募集しつゝありといへば不日採用するに至るべし

(ニ) 煙草專賣局の女工募集

煙草專賣局に於ても豫て多くの工女を採用せしが今回缺員凡そ三百名を募集すといふ

(ホ) 神戸の滿韓賣藥商會にては第一回行商として七名の看護婦を以て一團とし京釜鐵道沿道にて賣藥行商の爲め此程義州丸にて渡航せしめたりといふ是韓國にては男女の區別嚴重にして夫の不在中女子は男子より直接に物を買ふ等の事をも許されざるを以て今回同商會にては女子を使用するに至りしなりと

●萬國婦人大會

此程獨逸伯林にて第三回萬國婦人大會の開催あり英米佛其他各國の婦人にして數百名の會員を代表して出席せし者六十餘名あり六月十三日より六日間女子に關する重要な事項を熱心討議せる由今其概要を聞くに議題を教育、職業、社會及權利の四部に分ち教育部にては男女混合教育、女子の大學教育、女子の補習教育、女子の體育等が重なる問題なりし由又職業部にては盛んに女子の勞働者即女工の保護、女子に對する

報酬及女子の内職等に就て論議し社會部にては道德問題此問題は社會道德に關する多くの問題を含める者にして即女囚徒に關する件、男女品行に關する件、蓄妾の件、其他幼童保護法、アルコール禁制等の問題を議し權利の部にては組合組織の權、同業組合役員の選舉及被選舉權、寺院監督の權等を女子に附與するの適當なるを討議せり但し政治上に於ける選舉權を女子に與ふることの尙早論を獨逸婦人某會の會長より宣言せしが米國の二三委員も強て反對せざりし由而して同會は目下七八百萬人の會員を有すといふ

●大日本女子教育會

七月卅一日女子高等師範學校にて第一回總會の催しあり昨年八月創立以來の會の諸報告及規則改正に關する議事其他教育上の談話餘興等ありて中々盛會なりし由同會は毎月一回つゝ機關雜誌「女子教育」を發行し其内容頗嶄新なり目下

全國に五百五十人の會員ありといふ

●婦人讀書會

大山夫人鳩山夫人等の盡力に成れる同會は婦人の讀書を奨勵して知識を高め同時に家庭を高尙にするの目的を以て成立ち又會員は常に有益に高尙に且興味ある書籍を注意して輯集し書籍館を設け會員は隨意其書籍を閲覽することを得るのみならず時々打寄りて講讀し互に知識を交換し興味を分つ組織の由同會は英國人ミス、ウエストン氏大に賛成し名譽評議員として種々斡旋の勞を執られ會の事務所も永田町二ノ二八なる同氏宅に設けられ居るといふ

●獨逸の大學と女子と

獨逸の大學にては總べて女子の入學を許さざりしが此程より女子の入學を許せる者四五校あり而して其等の大學は外國婦人の傍聽をも許すに至りしといふ

●女子高等師範學校受験科

國語傳習所にては本月四日より女子高等師範學校受験科を開始せり

●女子商業學校

同校は創立後未だ日淺けれども此程已に第一回速成科卒業生を出したるが其成績良好にして十分商業の實務に適すといふ

●體操學校女子部

體操學校男子部は大森に移轉せしに付同女子部は本學期より麴町區下二番町なる成女學校の一部を借受けて授業を開始せり本會々員井口あくり氏毎週二回出校教授の勞を執らる



(非賣品)

明治三十七年十月廿一日印刷

明治三十七年十月廿四日發行

發行所 東京市本郷區弓町一丁目十三番地 櫻 蔭 會

編輯者 東京市本郷區弓町一丁目十三番地 齋 藤 秀 實

印刷者 東京市京橋區南小田原町二丁目九番地 中 野 鏝 太 郎

印刷所 東京市京橋區築地三丁目十五番地 帝國印刷株式會社

